
魔法係長桜井秀子

高柳 総一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法係長桜井秀子

【Nコード】

N7352Y

【作者名】

高柳 総一郎

【あらすじ】

何もつかめなかった女の、最後に残った小さな希望の残り滓。

この物語は、桜井秀子という女が希望の残り滓から見つけた、大きな使命の物語。

(pixivでも同様の作品を投稿しています)

第一話『始動』

1

「係長、おはようございます」

自分より少々年上の部下が軽くお辞儀するのを見て、桜井秀子の一日は始まると言っている。『六道商事企画課係長・桜井秀子』のチームプレートを立て、パソコンのスイッチを入れる。社内メールリストの受信箱は珍しく空だった。係長は他の平社員をまとめるという重要な役職だ、と個人的に秀子は思っている。当然、リーダーである自分にメールが来ていないという事は、それだけトラブルが起これなかったという事の印だ。それは秀子にとって喜ばしい事であったし、同時に少しつまらない事でもあった。

基本、商品企画という仕事はそれをひねり出すのが大変なだけで、それを売るのは販促部や営業部の仕事だ。しかも、六道商事は文房具の一流メーカーとして日本に君臨する会社であり、特に油性マジックの国内シェアは四十パーセントを誇っている。もちろん、秀子もこの間まで新型ボールペンの企画・開発に携わっていたが、そんな事は非常に稀だ。大ベストセラーがある会社と言うのは、それが電化製品や食品を扱っているので無いなら尚更。その商品に頼り切ってしまうというのが普通だ。今回のボールペンでも、あまりよい顔をしてくれない上司を口説き落として着手したものだ。

まあ、私に絶対の自信があったわけじゃないけれど。キャリアウーマンというのは、ある程度の地位が無いといけないと秀子は考えている。何故なら、女性が職場に居続けることを快く思わない男性の上司が未だに居るのも事実であり、そういう上司は大抵いい人ぶって『早く結婚したらどうだ』と良いところのボンボン

を紹介したがったりする。それを断るには、会社が手放したくても手放せないほどの根を張る。つまり地位を手に入れなければならない。

だが、私は凡人だ。

パソコンから目を離し、メガネを取って目をこする。秀子は今年で三十四歳になった。だが、相変わらず同じ生活が続いている。上司に頭を下げ、部下を怒鳴り、会議をして、パソコンの前に座り、疲れたと思う暇も無く会社の人間と飲みに行く。たまにバツティングセンターに行つて、あたりもしないのに部下や同僚の手前喜んで見たりする。大学をぎりぎりを出て、親のコネで何とか就職した会社で、毎日毎日同じ日々を過ごしている。

この前など、田舎の年老いた母がまたお見合いの話を持ってきた。この格差社会が進む日本で、自分より年収が上で、なおかつ自分を愛してくれるような男がどこに居るといふのだらう。人生は短い。もう三十四歳だと言ふのに、結婚しても、待っているのは老いだ。自分が愛した男に、そんな苦勞はして貰いたくない。苦しむのは自分だけで良い。秀子はそう思っていた。

「係長、お茶とコーヒー、どちらにします？」

秀子は、コーヒーしか飲まない。十二年も勤めてここで同じ時を過ごしている秀子にとつての『現実』を知らない部下を見る。二十代くらいの、まだまだ自分は大学生です、と言いたそうな顔がそこにあった。三十四歳ですでに、眉間にナイフで切りつけたようなしわがある自分とは、随分と違っていた。しわひとつ無い美しい顔。可愛らしいえくぼ。仕事一筋で生きてきた秀子には、もはや何一つ残つて無いものだった。

「係長、あのう……」

「コーヒーで良いわ」

羨ましかった。羨ましいあまり、彼女を見つめすぎたかもしれない。もしかしたら、嫌われてしまっただろうか。そんな事を考えている内に、デスクにはいつの間にかコーヒーが置いてあった。ご丁寧に、

白濁としたミルクが黒いコーヒーを侵食していた。

秀子はミルクが飲めなかった。

『 調べによると、男は意味不明な供述を繰り返しており 』

TVのニュースでは、相変わらず同様な出来事が延々と流れている。秀子は、そんなニュースを聞き流しながら、喫茶店で昼食のフレンチトーストを食べていた。同じように昼食をとるような同僚は居ない。二年前に、同期入社の子が結婚し、それきりだ。次の年の年賀状には、幸せそうなおその子と、夫が笑顔で写っていた。さつさと地球は滅亡しないのかしら。

秀子は元々温厚なほうだが、最近年のせいか少々愚痴っぽくなってきていた。そんな自分が、秀子はたまらなく嫌だった。核戦争による地球滅亡のシナリオを考え始めたころ、店の扉が軋むように開いた。会社に程近いこの小さな喫茶店は、最早レトロをとこの昔に通り過ぎていくようなボロい店だ。秀子はここのおまわり甘くないフレンチトーストが気に入っているためにここに来ているが、今の若い新入社員には物足りない店だし、レトロを愛する大人さえも寄り付きそうに無いボロさ加減で、ここの常連である秀子でさえ、何故つぶれないのかはなはだ疑問なくらい変な店なのだ。そんなこの喫茶店に客が来るというのは、一大事とも取れる出来事なのである。…肝心の老主人は、と言うと、あまり興味が無さそうにしてなかったりするのだが。

入ってきたのは、でっぷりと太った男だった。まだ5月だというのに、いまにもはちきれんばかりのYシャツは汗染みが出来ており、手には少し水滴がしたたっているほど濡れているハンカチを持っていた。どこかのサラリーマンかと思っていると、いつの間にか秀子の前の席に座っている。空気が生暖かくなったような気がする。男の吐息の一つ一つがとにかく不快に感じられる。……そう感じないほうがおかしい。

「すみません、桜井秀子さんですよね？」

男が息を切らしながら話しかけてくる。別に走ってきたようにも思えない。あまり関わりたくないが、目の前で話しかけられて無視する、と言うのも感じが悪い。しかも、よりによって自分の名前をフルネームで言っている。もしかしたら、取引先の人かもしれない。「そ、そうですか……」

しかし、誰であつたのか思い出せない。秀子は焦った。会社員と言うのは、マナーが最も問われる職業だ。もしこの男が何処かのお偉いさんだったりすれば、秀子に重大なダメージを与えてしまう可能性もある。一体誰なのだろう。

「本当ですか！？ いやあ、良かった良かった。実は私、こういう者です」

男ははちきれそうなYシャツのポケットから、少しシワの入った名刺を取り出し、秀子に手渡した。それには『日本魔法少女協会スカウト部門チーフ・酒木原秀明』と印刷されていた。……秀子は、自分は少し疲れているのでは無いか、仕事の途中で居眠りして、夢を見ているのではないか、と思つてしまった。自分の頬をつねってみたが、痛かった。……現実だとすれば、『日本魔法少女協会』とは一体何なのだろう。少し前に流行った、メイドキツサなるものと同じようなものなのだろうか。秀子の頭の中で、まるでシャボン玉のように憶測が浮かんでは消えていったが、確信を得られるような答えは得られなかった。まず、メイドキツサなる所にスカウトされているのであれば、この酒木原と言う男は少々見当違いをしている。まず、秀子はそのままで美人ではない。しかも、眉間にナイフで傷つけたようなシワがある女に、

「いらっしやいませご主人様」

などと言われて喜ぶ男が存在するのであろうか。たとえいたとしても、秀子はそんなところで働きたくは無い。

「どうやら貴女は勘違いしていらっしやるようですね」

出されたおしぼりで色々なところを拭きつつ、酒木原は言った。

「スカウトと言っても、あくまでお話を聞いていただくことを前提としています。お嫌でしたら、断ってください結構です」

酒木原は出された水を一気に飲み干した。相当のどが乾いていたのだろう。さらに老主人におかわりを促した。

「スカウト……って言われても……。一体、何のスカウトなんですか？」

秀子は、氷が溶け切ってしまったコーヒーを飲んだ。水とコーヒーは、混ざるとやはり水が勝ってしまうようだ。それはすでに水に侵食されていた。

「魔法少女です。……プリントミスですかね？ 書いてありませんか？」

「書いてありますよ」

「では、私が言いたい事も分かりますよね」

「分かりません」

即答だった。秀子は絶対そんな事分りたくなかった。

「んー……分かりました分かりました。じゃあ、説明しましょう」

秀子は、もうここを立ち去ってしまったかった。だが、お昼休みはまだ一時間近く残っている。どうやって理由をつければ良いのか、秀子には検討もつかなかった。

「要するに、桜井さんに魔法少女になっていたいただきたいんですよ」

「意味が分かりません。新手の風俗なら断ります」

「いえいえ、そんないかがわしい職業ではありません。……それにお言葉ですが、私が風俗を開くならもっとほかの人を使いますよ」
秀子が男をにらみつけると、さすがに言い過ぎたと思ったのか、とてもバツの悪そうな表情を作った。最も、手元ではいつの間にか運ばれてきたコーヒーに角砂糖を三個ほど突っ込んでいた。大して悪いとも思っていないのだろう。

「桜井さんは、小さいころアニメはご覧になっていましたか？ ほら、コンパクトを開いて呪文を唱えたり、ステッキを振って箒を乗り回すアレです」

「はあ、まあ人並みには」

「でしょう？……あ、すみません。私にも彼女と同じものをもらえますか？」

70はゆうに超えているであろう老主人がよろよるとフレンチトーストを持つてくると同時に、再び酒木原が口を開いた。

「まあ、魔法少女と一口に言っても、種類がたくさんありましてね。トラブル解決タイプ、純戦闘型徒手空拳タイプ、純戦闘型砲撃タイプ、医療従事タイプ・科学応用タイプ……数え切れないほです。それだけ、魔法少女の需要が高いという事でしよう」

「はあ。私は実際にそんな『魔法少女』なんて見た事無いですけど」「それなんです！」

突然大声をあげた酒木原に、秀子は驚きのあまり危うくひっくり返ってしまふところだった。

「大声をあげてしまつて申し訳ありません。ですが、桜井さんの言うとおりなんです」

「はあ」

酒木原は、どうやらこの店のフレンチトーストが痛く気に入ってしまったらしい。老主人に今度はフレンチトーストを三枚頼むと、再び秀子の方に向き直った。

「女性であるあなたに話すのは少しためらいがあるのですが……。九十年代以降、女性の性の乱れはどんどん加速しています。ご存知ですね？」

秀子は最早あきれて物も言えず、とりあえずうなずいておいた。

「それに伴つて、早くからそういう行為に及ぶ人が増え、我々が求める魔法少女の条件に合う女性はどんどん減りつつあるのです。魔法少女になるための第一条件は処女ですからね」

「帰つていいですか」

「お願いしますからもう少しだけ話を聞いてください。二十年前、全国に五千人居たはずの魔法少女は、いまではもう百人近くまで減つてしまつているのです」

「それで、私を魔法少女にしたいと。そういう事ですか？」

酒木原はしきりにうなずいた。秀子がようやく理解できたのが嬉しかったのか、首がちぎれんばかりにうなずいていた。

「お断りします」

酒木原の両眼が大きく見開かれた。……大方、まさか断られるとは思っていなかったのだろう。

「確かに、どう調べたのか分かりませんが、私はこの年までずっと処女です。……別に興味が無かったわけでも無いですし、機会が無かったわけでもありません。でも、そんなわけの分からない職業に就いて、今の生活を捨てるような真似はしたくありません」

言えた。秀子は心中自分を褒めたい気分だった。ここまで自分の言いたい事をはっきり言えたのも久しぶりのような気がした。だが、酒木原は笑っていた。あれだけはっきり断られたというのに。

「ほう、そうですか。いやいや、確かに貴女が言う事はほとんど本心のようなですね」

「どういことですか」

「貴女、一度で良いからドラマの主人公になりたいと思ったことはありませんか？」

「はあ」

「ドラマの主人公は、それが喜劇でも悲劇でも、変化と刺激に満ちた生活を送っています。まあ、主人公にとってはいいい迷惑かもしれませんがね。しかし、貴女は今の変化の無さ過ぎる生活に、飽き飽きしているのではないんですか？」

「それとこれとは……」

「別だと言いたいんですか？」

確かに、凶星だ。言い返す言葉も無い。

「大丈夫ですよ、桜井さん。今の会社を辞める必要なんかありません。それに、基本的には一年契約で更新性です。いやでしたら一年だけ頑張つてやめていただいて結構ですし、活動するのは夜だけです」

「どうして夜だけしか活動しないんですか？」

酒木原は鞆から書類を出しながら、こっちに目線を合わせずに答えた。

「魔物は夜にしか活動しないからです。大丈夫ですよ、桜井さんには十分な戦闘能力があるはずですから。……桜井さん、はんこか何かお持ちですか？ 出来れば、銀行の届け出印がいいのですが」

「ちょ、ちよつと待ってください」

何も秀子は、そんな得体の知れない魔物などと戦うとは言っていない。確かに酒木原が言うとおり、日々の生活にはうんざりしている。毎日毎日同じようなループが続き、将来どうなるのか分からない。十二年間勤めてきた会社でも、いまだ係長だし、仕事を舐めている後輩や部下からは負け犬呼ばわりされているのを知らないわけではない。

「大体、私がそんな事をやって、なんのメリットがあるんですか？」

「もちろんあります。あなたが今勤めている会社で一生働いても得られないくらいの報酬をお支払いします。桜井さんは、結婚する気がありませんか？」

「そ、それは……」

「隠さなくても、事前調査で確認済みです。老後は今のご時勢、おひとりじゃ大変ですよ？ 厚生年金も出るでしょうが、結果的に貧乏で寂しい生活が待っているのは目に見えています。協会に一時でも所属すれば、老後の生活も委託業者の超高級老人ホームで暮らせます」

いくらなんでも胡散臭い……が、秀子は不思議とそちらの怪しさを疑うのでは無く、老後の暮らしの事を考えていた。秀子は、自分がすべて苦しみればいいと思っていた。周りの人間に迷惑をかけるのだけはごめんだからだ。だが、それは逆ではないだろうか。自分が苦しむ分だけ、周りの誰かも苦しむのではないのだろうか。どんなにつっぱっても、いつかは老人ホームやヘルパーに頼るときは来るのだろう。それを自分が苦しんでいると言い張るのは、愚かしい事だ。

実際に苦勞しているのは、ほかでもない老人ホームの職員やヘルパーだし、彼らに頼っている事を『苦しんでいる』などと言うのは愚の骨頂だろう。それに、老人となった自分の周りに、誰が居るというのだ。親は死に、友人は口クにおらず、今まで同僚に冷たく接した自分に、誰が好き好んで一緒に居てくれるのだろうか。そう考えると、秀子の心の中には、不安が洪水のように押し寄せてきた。

今はいい。会社と言う居場所があるから。だが、老後はどうなる？

「あの……桜井さん？」

酒木原は、いつの間にか三つ目のフレンチトーストを食べ終わっていた。

「何でもありません」

とりあえず話を聞いてみよう。確かにわけの分からない話である事は間違いない。だが、秀子はそれ以上に不安に駆られていた。

「一応、その魔物とかの説明をして欲しいんですけど……」

酒木原は驚いて、思わず口に運んでいたフレンチトーストを落としてしまった。

「ああ、そうか！ 説明するのをすっかり忘れていましたよ。まず、魔物ですが、大した事はありません。人間の悪意が生み出す化け物ですが、やつらに大した知能は無いですし、桜井さんの能力の高さがあるなら、朝飯前でしょう」

秀子にはいまいち理解できなかった。この際、この男の話をすべて信じるとしても、秀子自身にそんな能力の高さがあるとは到底思えなかった。大学時代はラクロス部だったが、すでにその時の能力は失われている。何を根拠にそんな事を言うのだろうか。

「実は、人間には潜在的に魔力があるんですよ。その力は年をとる毎に上昇し、大体二十歳前後でピークを迎えます。三十を越えた人間は、理論上際限なく魔力が上昇するのです。しかし、先ほど言った通り、童貞や処女で無くなると魔力は無くなってしまふのです」「つまり、私はちょうど脂ののった旬の魔法少女ってことですか」「言い方は悪いですが、まあそういう事になりますね。……そう言

えば、まだ返答を聞いていませんが……。どうするんですか？ 桜井さん。強制はしません。あなたの判断がすべてです」

秀子の心は意外にも揺れていた。老後を考えると、わけの分からぬ職業でも、ヘッドハンティングの一種だと思えばかなりおいしいだが、この男の話が全て嘘だとしたら。自分がさつき言ったとおり、変な風俗で働かされるかもしれない。

「……分かりました。出来るかどうか分かりませんが、やらせて頂きます」

だが秀子は『今から』逃げたかった。現実から目を逸らしたいが、老後も見据えるという矛盾を孕んだ自分の欲望を満たしたかった。

「……分かりました。次は登録名なんですが……そうそう、流石に桜井さんくらいの女性が魔法『少女』と名乗るのはキツイですね」

「私も嫌です」

「桜井さんは確か……そうそう、係長でしたね。なら『魔法係長』でどうでしょう？」

「まあ、別に『少女』以外なら……」

「そうですね。なら、魔法係長で登録しておきますね」

酒木原が契約書にそう書くのを見ながら、秀子はある種の恍惚感さえ感じていた。それが自分が決断できた事に対するものなのか、今まで安全な道を通って来たのを逸れた事への背徳感なのかは分からなかった。だが、この男が風俗の人間だろうと、人身売買のブローカーでも、魔法少女を集めていてもかまわなかった。秀子にとって、その矛盾した欲望を満たす事だけが最も大切な事だったのだから。

「……以上で、説明は終わりです。何か質問はございますか？」

「いくつか質問しても良いですか？」

「どうぞ」

「まず、この武器は何なんですか」

秀子の目の前には、明らかに極めた人が持つような銃が置いてあった。今更ながら、秀子はどうしてもない事に首を突っ込んでしまった、と悔やんでいる。

「違いますからね。勘違いしないでください。これは魔銃トカレフです」

「トカレフって言うてるじゃないですか」

「よく見てください。グリップ……って分かります？　そうそう、その握る部分です。そこには普通は銃弾を入れる弾倉があるんですが、無いでしょう？」

確かに、何も入っていない。それに、プラスチックのように軽い。

「弾は自身の魔力を込めますから、媒介さえあればなんら問題ないんです。昔はメルヘンチックで綺麗な色をしていたのですが、最近シックな色がブームですから。どうです？　大人の魅力があふれ出ているでしょう？」

むしろ青い服を着た国家権力の方々が惹きつけられそうな魅力があふれ出ている、と秀子は思ったが、あえて深く聞かない事にした。シックでないデザインの事を考えたら、気分が悪くなってきたからだ。

「もう一つだけ聞いても良いですか？」

「何なりどうぞ」

「まさかとは思いますが……コスチュームとか」

「ありますよ」

秀子が言い終わるか終わらないうちに、ある意味一番肯定して欲しくない事実を肯定されてしまった。

「メイド・ゴスロリ・女子高生・少女風……。リクエストさえあれば、オーダーメイドでお作り……」

「じ、じゃあ目立たないスーツか何かを」

「しますが、桜井さんの場合、一年だけの勤務ですから、一からお作りするのはもったいないですね。協会のレンタル品を使いましょう」

一縷の望みが絶たれてしまった。……いや、待てよ。秀子は思い直した。酒木原はシックなデザインが流行っていると言った。ならば、コスチュームもシックなデザインが流行っていてもなんらおかしくないではないか。

「あおう、サンプル画像とかはあるんですか？」

酒木原はベルトが少しきつくて苦しいのか、少し顔をゆがめながら、腰のポケットから何とか携帯電話を取り出した。そして、秀子に画像を見せてくれた。赤を基調としたドレスのような作りで、動きやすくするためか少しスカートが短めになっている。胸には大きなリボンがあしらわれており、これも派手なオレンジ色をしている。袖口にはフリフリ素材が使われているようで、それを着ているサンプル画像の少女は、まるで携帯の中で踊っているようだった。

「……派手すぎませんか？」

「協会がスタンダードとして基準にしている、現在最高性能の魔法少女服ですよ？」

そんな事は知らない。再び秀子は気分が悪くなった。脳内では、赤いフリフリのドレスを着て、右手に銃を握り、夜空を駆け回りながら化け物と戦う自分が居た。三十分前に自分で決めた事とは言え、あまりに軽率だった、と悔やまずには居られなかった。

「あと、移動手段なんです、これになります」

酒木原が再びバッグをあさり、野球ボールほどの赤い水晶玉を七つ取り出し、テーブルに慎重に置いた。

「何ですか？これは……」

「宝玉です。これに魔力を込めると、桜井さんに乗せて飛べるようになります」

胡散臭い事この上ない。大体、魔法使いは箒に乗るものではないのか？秀子がそう訝っていると、酒木原が顔を覗き込んできた。

「ああ、もしかして箒を期待してましたか？」

「期待してたわけじゃあ無いですけど」

「昔は箒だったんですよ？ ですがホラ、上昇するときの衝撃で痔

になる人が続出しまして。おまけに、目立つんですよ。箒つていうのは」

確かに、あんな柄の細いものに乗りたいくは無い。……秀子は、今日始めて酒木原の言う事に納得できたような気がした。

「さて、これで本当に私からの説明は終わりです。後ほど服をお届けしますから、メールの支持どおりに魔物を退治してください」

そう言うのと、酒木原は立ち上がった。秀子が顔を上げると、そこにはもう誰も居なかった。テーブルには、フレンチトーストの皿が三枚とコーヒーの飲み残し、一万円札が置いてあった。

「係長、お帰りなさい。どこまで行ってたんです？」

年上の部下が笑みを浮かべながら話しかけてきた。秀子はそれを笑顔ではぐらかすと、再びデスクに座った。パソコンを立ち上げると、受信メールはやはりゼロだった。会社では、また延々と同じ日々が続くのだろう。不安が無いと言えば嘘になる。だが、秀子の中では矛盾した欲望を満たした事の満足感の方が遥かに大きかった。酒木原から貰った道具を、デスクの引き出しの奥に閉った。

「あの……係長」

デスクの前に、今朝の女の子が立っていた。

「今朝はすいませんでした。私……係長がミルク嫌いなもの知らなかったんです。本当にすいませんでした」

彼女の髪が揺れる。

「いいの」

「え？」

「いいのよ。怒ってないから。それより、コーヒー入れてくれない？」

彼女ははじめ目を丸くしたが、すぐに笑顔に戻り、またあのえくぼを見せてくれた。運ばれてきたコーヒーには、ミルクが入っていなかった。秀子が口に運ぶと、口の中にほのかな甘みが広がった。ど

うやら、また気を利かせて砂糖を入れてくれたらしい。秀子は、ブ
ラック派だった。

第二話『争い』（前書き）

相入れぬ二人。相反する感情。思想。譲れない思いがそこにあるというのなら、闘争こそすべてを決するにふさわしい。それを無謀、野蛮と卑下し批判することは、たとえ神でも出来はしない。なぜなら、闘争は神が作った悪趣味なゲームなのだから。次回、『争い』。譲れぬ秀子の決意が大地をゆるがす。

第二話『争い』

2

「桜井君、どうかしたのかね」

企画課課長の大川が怪訝そうな顔で部下の顔を覗き込んだ。

「何かいいことでもあったのかね？　ずいぶんと嬉しそうだが」

「いえ、別に」

桜井秀子は、にやついていた顔をいつもの無愛想気味の顔に無理やり戻すと、再びパソコンのモニタに向かい始めた。実際、彼女は嬉しいのだ。彼女は、彼女の枷となっていた、サイクルから外れた。その事がたまらなく嬉しいのだ。もう自分は、周りとは違う。確実に頭一つ抜けたところにいる。その優越感がたまらない。モニタに移る彼女の顔は、やはり少しニヤけている。大川もまたこちらを怪訝そうに見ている。秀子は人とは違う。そんな小さな事実が、秀子の顔を落ち着かないものにさせていたのだ。

「係長、製造コストの見積もりが上がってきたんですが」

部下の報告に気づくのも数秒遅れる。秀子の脳内はまさしくお花畑状態であった。結局この日は普段ならしないようなミスを重ねる始末で、大川からの小言も右から左へ抜けていった。ふらふらとまだ夢見心地のようで、普段なら入るのに躊躇するような牛井屋へ吸い込まれて行った。

「おや？　奇遇ですね」

見慣れた巨体に汗ばんだ顔の男がいると思ったら、案の定酒木原だった。普段の秀子であれば、彼を疎ましく思ったことだろう。夜八時過ぎに、いい年した女が牛井屋でひとりできるところなど、知り

合いには見られたくないものだ。

「酒木原さん。こんばんは」

自分でも少し声が上がっている、と思った。おそらくこれから起こることに、自分自身期待しているのだろう。

「わかりますよ、お気持ち。牛井は老若男女、どうしても食べたくなる時があるものです」

酒木原が冷水がなみなみと入ったピッチャーから、次々と水をコップに入れ飲み干していく。彼がいかに今日も汗をたくさんかいたのかがよくわかる。

「ええ。普段は一人じゃ入れません。……正直、今夜が楽しみです」
「それは頼もしい限りです。今夜は初陣ですから、気負わずやってください」

店員が怒号に近い声で、酒木原の目の前に牛鮭定食を運んできた。

酒木原は、味噌汁のわかめを食べおわると同時に、凄まじい勢いで牛井をかきこみ始めた。

「先日送ったメールはご覧になりましたよね。遭遇ポイントでの魔物出現予定時刻は二時間後。レベルは三ですから、桜井さんにとつてはむしろ格下、楽勝の部類に入るでしょう。我々サポートスタッフも現場にて待機しますので、ご安心を」

と、言うような事を酒木原は言ったようだった。半分は口の中の牛井に阻まれ、聞こえなかったのだから、これが正確であるなら秀子の聴覚は鋭いほうだろう。

「報酬はどうなるんですか？　そういえば聞いてないんですが」

「契約書、読まれなかったんですか？　我々日本魔法少女協会では、年棒制を採用しています。我々の査定ですと、秀子さんの年棒は五千万となっております」

「五千万ですか！？」

予想外の破格であった。秀子が魔法少女などというふざけた仕事を引き受けたのには三つ訳がある。ひとつ。秀子は、酒木原の『老後の不安』という言葉に恐怖を覚えた事。ふたつ。秀子は、このまま

の退屈で単調な人生に飽いていた事。最後に、経済的にも豊かになると酒木原に言われたからである。

秀子は単なるサラリーマンである。経済的には一人暮らして問題ない。だが、都内のマンションで寂しく過ごす今の生活に、何の魅力があるのだろうか。何もない。今から結婚しても、たかが知れている。せめて老後くらい、豪勢に暮らしたいと思ったのだ。豪勢といっても、少し贅沢が出来ればいいと思っていた矢先にコレである。棚からぼた餅ということわざがよく似合うことだろう。

「ま、なんにしる十分な報酬かと思えます。……なんとも言いますが、くれぐれも気負わずやってくださいね」

いつの間にか、牛鮭定食は空になっていた。本当に酒木原は食べるのが早い。彼の特技ともいえるのでは無いだろうか。

「それでは、遭遇ポイントで会いましょう」

酒木原は千円札を席に置き、去っていった。

薄暗い廃工場がそこに広がっていた。今回の遭遇ポイントは間違いない。ここのはずだが、酒木原のいうサポートスタッフの姿は見当たらない。

「……『変身』」

秀子がぽつりと呟くとほぼ同時に、秀子は完全に『変身』を完了していた。燃えるようなオレンジ色のフリフリドレス。片手には持ってきた黒い銃『魔銃トカレフ』が握り締められている。

「……どこにいるのかしら」

つぶやいた声が拡声器を通したように響いた。同時に、雷鳴が轟くような音がした。今日は雨は降らないと朝の天気予報で言っていた。それに、さっきまで月が見えるほどきれいな夜だった。突然雷が鳴るわけがない。何かと考え込んでいると、今度は非常に癪に障る

ような甲高い笑い声が工場中に響き渡った。

「ここで会ったが百年目！ 情報通りにやってきやがったわね！」
甲高い。キンキン響く声は秀子の耳を塞ぎたいという欲求を満たすのに十分なものであった。女の声は反響に反響を重ねており、どこにいるのか分らない。

「私の私による私のための騎士！ あの女をやーっしておしまい！」
再び響く甲高い声を合図にしたのか、地面が揺れ始めた。何かが来る。女のカンと言うべき物が、秀子がある場から突き動かしだした。案の定、地面が風呂桶の栓を抜いたように渦を巻き始め、その真ん中から何かが姿を現した。泥で出来た人型の何かが、先ほどの雷鳴と聞き間違っような咆哮をあげた。

「なんなのよ、もう！」

トカレフを構え、トリガーを引く。光線が泥人形を穿つ。雷鳴が轟く。だが、泥人形は動きを止めなかった。泥が、まるで間欠泉が噴出すようにせり上がり、泥人形がそれに腕を突っ込む。すると、泥で出来ているのかよく分からないが、棒状の物体が泥人形の腕に握られていた。

「あたしの『ロードナイト』はそんなもんじゃ無駄よ！ カリバーンを持ってしまったロードナイトを止められる魔物はいない！」
大体、人間が動かす魔物があるなんて事があるのか。いや、酒木原は何度も『言っておかなくてはいけないもの』を忘れる事が多い男だ。『魔法少女が動かす魔物』が居てもおかしくないではないか。そんなことを考えているうちにも、カリバーンの一閃が迫る。泥のもつイメージから、鈍重かと思っていたが、とんでもない。鋭い一撃を確実に叩き込んでくる。もちろん、トカレフを何度も打ち込んではいいる。だが、この魔銃トカレフの特徴として、連射すると威力が落ちるようなのだ。只でさえさっきの太い光線が聞かないのに、泥人形にしてみれば、蚊に刺される程度だろう。そもそも、この泥人形に痛覚が存在するのかさえ怪しい。

「どおーしたのかしらあ？ 言っとくけど、降伏なんて許さないん

だから！」

オレンジのフリフリドレスのおかげで、身体能力も多少は向上している。だが、中身はこの前までごくごく普通の女だったのだ。百戦錬磨の戦士のようにはいかない。しかも、正確無比で叩き込まれるカリバーンのおかげで床は凹んでおり、くぼみのひとつに足をひっかけ、すっ転んでしまった。

「ぐっ……」

「魔物のくせに魔法少女の真似をするなんて、なかなか生意気ね。おっ死になさい！」

カリバーンが無情にも振り下ろされる。情け容赦ない死が迫っていた。思えば、短い人生だった。だが、秀子と思う。自分は何を成したのだろうと。人は一生をかけて、何かを成す。だが、自分は何を成したというのだ。富も、名声も、地位も、友情も、恋も、何一つ成していない。それで生きてきたと言えるのか？

じゃあ、このまま死ぬべきだろうか。カリバーンは、地面にめり込んだ。

お世辞にも美しいとはいえない、多少茶色になりつつある金髪をなびかせつつ、工場の奥から一人の女が姿を現した。ビビットピンクでレースのついたひらひらのドレスを着込み、手にはこれまたピンク色の杖のような物が握られている。

「さすがね、私のロードナイト。貴方は最高よ。ビューチフルよ。それでこそこのミッチー様の奴隷にふさわしいわ！」

ミッチー、と名乗る女は、甲高い笑い声を上げた。

「動くな！」

「動くな、といわれて動く人間なんていないわ」

ミッチーが後ろを振り向くと、恰幅のいい男と、黒い服を着込み、銃を持った数人の男が立っていた。

「あらあ、久しぶりね、酒木原さん。聞いたわ、貴方出世したんですって？」

「そんな事は今関係ないですね。堀田三津子さん」

「私をその名前で呼ばないで！」

ミッチーこと三津子は、酒木原の言葉に態度を豹変させた。

「まさか、もう七人衆が動いたのですか」

三津子は答えない。

「一体何をするつもりなんです、七人衆は。これは明らかに契約違反ですよ。魔法少女同士が争うなど、絶対にしてはならないんです！」

「黙りなさいよ！ 私が戦っているのは『魔法少女のフリをする魔物』よ。別に契約違反などではないわ」

「七人衆たる貴女が、そのようなわがままでは困ります」

「黙りなさい！ 何が七人衆よ！ 私は私よ。七人衆じゃない！」

泥人形が咆哮を上げる。カリバーンを再び振り上げ始めた。

「総員退避！」

酒木原達は万が一のため、常に最低限の武装をしている。だが、今回の魔物は低レベルとの報告を受けていた。魔法少女に対抗できる装備など、携行しているはずも無い。それほど、魔物と魔法少女には埋めがたい差が存在するのである。

「私は堀田じゃない！ 三津子でもない！ これからは『魔法少女ミッチー』としてひとりで生きるの！」

カリバーンが酒木原たちに襲い掛かる。地面が穿たれる。酒木原たちはごくごく普通の一般人であるため、カリバーンの一撃などを食らえばひとたまりも無い。ひき肉になるのがオチだろう。

「この魔法少女ミッチー様が、宇宙で一番自由なの。誰の命令だつて聞きはしないわ」

三津子のテンションはそれこそ最高潮に達している。酒木原は内心焦っていた。泥人形自体は、一般に『魔物』のカテゴリに入る。そもそも魔物とは、社会構造上発生する、感情の『カス』の塊だ。パ

ソコンが定期的にデータのクリーニングをしなければならないように、社会というひとつのシステム構造体は、『魔物』というカスを生む。現在の複雑な社会は、それだけ様々なタイプの魔物を出現させているのだ。今回、酒木原が『至極普通の』魔物だと判断したのが間違いだった。魔法少女の中には、自分が直接手を下すタイプのほかにも、いわゆる『召喚師』タイプが存在している。彼女たちはいわば負の感情を人工的に爆発させ、それを構成物質として自分の僕を生み出すのである。堀田は、『召喚師』タイプの魔法少女としてかつて一線級の活躍をしていた女だ。ある事情により衰えてしまった今でも、魔法少女協会最大戦力の七人を示す、『七人衆』の一人に数え上げられている。それがこのように身勝手なことをされたのでは、サポート側としてはたまったものではない。

「チーフ、どうしますか？ 堀田の魔力は桁違いです。しかも今の我々の装備では泥人形を突破して堀田を確保する事は難しいでしょう」

「そうですね。しかし我々がまずすべき事は、桜井さんの救出です。堀田をひきつけて、桜井さんの救出をすることだけを考えましょう」酒木原は冷静だった。ベテランの彼にとっては、予想範囲外の出来事などめったに起こりはしない。だが、今回は状況がまずい。まずすぎる。

（まさか桜井さんが押し負けるとは）

秀子が負けるという可能性を、正直酒木原はほとんど考えていなかった。いや、考えていないというのは流石に言い過ぎだったが、本当にこういう状況に陥るとは考えもしていなかったのだ。いくら魔力が高くても、経験が無ければ意味が無い。酒木原はそう考えた。買いかぶりすぎていたせいで、自分たちの慢心のせいで、秀子は恐らく命の危機に瀕している。それだけは確かな事なのだ。

「チーフ！ 桜井さんはあっちです！ こちらで堀田を引き付けます！」

「三分あれば大丈夫です！ お願いします！」

数人のスタッフが、携行している手榴弾のようなものを泥人形に向かって投げる。一般的な爆発を引き起こすものではなく、一種のブラックホールを発生させるものである。ブラックホールが引き寄せるものは、『魔物が纏う魔力』。魔物が『負の感情が変質したもの』であることはもはや周知の事実であろう。魔物は、その姿を維持するために、魔力をいわば皮膚のように纏い、自身の形が崩れないようにしているのである。魔物とほぼ同じ構造を持つ堀田の僕にも十分効果があるのだ。そうしてブラックホールは、泥人形の纏う魔力を引き寄せ、消滅させ始めた。絶大な効果とまではいかないだろうが、泥人形を引き付けるくらいは可能なはずだ。

「桜井さん！ 起きてください！」

返事はない。秀子が着ているものは、魔法少女協会の誇る最新型のスーツである。たとえダンプに轢かれようと、露出している頭に衝撃が無ければ、骨折すら防ぐ事ができる。とは言え、自分より五倍以上の大きさのある泥人形の一撃を食らったのだから、脳震盪くらいはおこしていても不思議ではない。魔法少女同士の戦いは、お互いの死を招くほど激しいのである。

「起きてください！」

「起きる前に殺つてやるわよ」

堀田の甲高い声が響く。時間切れだ。目の前には、泥人形がカリバインを構えた状態で聳え立っていた。まさに絶体絶命である。

「完全なるトドメというヤツを刺させてもらっわ」

カリバーンが振り下ろされる。

流石の酒木原も、秀子を抱えて逃げる事は不可能に近い。秀子とはかく、自分が死を逃れる事は出来ない。死は経験できない。それは誰であっても例外ではない。酒木原は自らの死を覚悟することは出来なかったが、迫ってきている死を感じることは出来た。

何時間がたったのだろうか。永遠にも近い時間が過ぎたような気がしたが、酒木原はすぐにそれが間違いであつたと確認する事が出来た。生きている。

「何もやっていない」

桜井秀子が立つていた。先ほど彼女の事を『買い被りすぎた』などと言った酒木原だったが、その発言をすぐに撤回しなければならぬ状況である。何故なら、彼女は魔銃トカレフを掲げ、それでカリバーンを受け止めているのである。いくらブラックホールで魔力を減らし、多少なりとも弱っている泥人形の一撃であつたとしても、その重量まではどうにもならなかったはず。何よりも、彼女は先ほど死の一手手前まで行つたはずなのだ。そんな彼女が、スーツによつて『死ぬ事はない』事を分かつていたとしても、こうまでして堂々と攻撃を受け止め、立つていられるというのだろうか。

「私はまだ何もしていないんです」

「は、はあ……」

「死ぬことは簡単です。諦めれば、多分死ぬんでしょう。でも私はまだ諦めたくない。だって私は、まだ何も成していないから」

堀田は愕然としていた。泥人形は間違いなく質量を持っている。トランクくらいは余裕で押しつぶせる。いくら素晴らしい耐久度や能力を持っていたとしても、質量には勝てない。質量こそ力の全てなのだ。

「あんたはどうして潰れないの？ どうして？」

「話す必要はありません。私にも分りませんし」

「何だかよく分からないけど、貴女はこのミッチー様に喧嘩を売ってるよね……」

「それなら一生そう思っていればいいじゃないですか。知ってます？ 嫉妬をする女は結婚出来ないそうですよ？」

「魔法少女にそんな事言ってもしょうがないと思つたわよ？」

「少女って年でも無いでしょう？」

水を打ったような静寂がその場を支配した。酒木原は長年の感覚で、

この勝負が一瞬の元で決着がつくと直感した。秀子の雰囲気が違う。堀田も今までのふざけた態度を取ってはいない。両者とも、実力のある魔法少女であり、そんな二人が不器用ながら本気を出している。それがどれほどの物かは、酒木原には理解し得ない。ベテランのサポートスタッフとはいえ、魔法少女同士が本気を出して戦うとどのような事が起きるのかなど、理解の外にある。事例がほとんど無かったのだ。

「やっちゃいなさい！ ロードナイトオ！」

咆哮。雷鳴の轟くような咆哮。カリバーンが再び秀子を襲った。トカレフから太い閃光が放たれ、カリバーンを穿つ。砕く。泥人形には、それだけで反撃の手段は無い。カリバーンを復元するにも時間がかかる。秀子の勝ちがほぼ確定した瞬間であった。

「ば、馬鹿な！ このミッチー様のロードナイトが！」

「大したことはないんですね、ロードナイトなんて大層な名前の割には」

宝玉を靴底に仕込み、魔力を足にありつたけ込める。秀子はその反動によって宙に飛び出した。ほとんど無効化された泥人形などもう怖くは無い。堀田を守るものは、もう無い。城壁は崩れたのだ。

「桜井さん！ 堀田を、本体を叩いて下さい！」

「分かりました！」

秀子は腕を引いた。宝玉の推進力と、スーツによる身体能力の向上で、パンチを放とうとしているのだ。堀田も魔法少女の端くれとはいえ、一般的な女性である事は間違いない。一撃入れることが出来れば、それで勝負は決する。

「あんななかに、このミッチー様は負けられないのよオ！」

堀田もまだ諦めてはいない。時間を稼げば、再びカリバーンを復元する時間も稼げる。まだ勝負は互角なのだ。秀子の拳が、堀田のステッキを叩く。

「やるわね」

「貴女こそ」

にやりと笑みが浮かぶ。考える事は二人とも一緒だった。堀田は秀子の拳をステッキで受け流し、秀子はトカレフで拳にあわせ、直撃を避けた。もちろん、二人は今日始めて出会うし、秀子にいたっては人生で初の殴り合いである。というか、人生でここまで本気で、しかも女性同士で殴りあう事などあるのだろうか？　だが、一つだけ確かなことがある。秀子は、高揚感を感じていた。拳を交える事によって、高揚感を感じるなんて、秀子には初めての経験であった。秀子は、堀田と殴り合いながら、自分の性癖はもしかしてサドなのかもしれない、などと冷静に考えていた。

「だけどねえ、勝つのはこのミッチー様なのよ！」

堀田は持っていたステッキを秀子に向けて振り下ろした。トカレフで殴打を受け止めた秀子だったが、それが間違っていた。ステッキは折れ、トカレフは衝撃でトリガーが碎けてしまったのである。

「折れちゃいましたね」

「あんたのもね」

堀田は躊躇無く、拳を突き出した。綺麗な右ストレートが、秀子の鼻に決まる。今度はメガネのフレームが折れた。

「折れたわね」

「ええ。貴女の悪趣味なステッキより大切なメガネのフレームがね」
秀子は痛みを我慢しつつ、堀田の腹に拳をぶち込んだ。立っていない。いつ食べたものかは知らないが、胃の中の物が吐しゃ物として、血と混じりながら堀田の口から流れ出した。いくらスーツが優秀でも、衝撃を完全に無くす事は不可能なのだ。ここまでくれば、秀子も容赦はしない。今度は腹に蹴りを入れる。身体能力が上がっているためか、堀田の体が多少浮いた。

「降参、しますか？」

「黙りなさいよ」

堀田はもう立っていられない。が、彼女の魔法少女としてのプライドが地に伏せる事を許さなかった。強引に大地を踏みしめ立ち上がる。

「やせ我慢にしか見えませんが」

「貴女、耳は大丈夫なの？ ミッチー様が黙ってろって言ったのよ？」

吐しゃ物と血で塗れたビビッドピンクのドレスのポケットに手を突っ込み、何か丸いものを取り出した。宝玉である。秀子の物と色も大きさもほぼ同じ。それを、手に握りこみ、拳を作る。

「私の顔にこれ以上傷なりなんなり作るわけにはいかないのよ」

「奇遇ですね、私も同じなんです。明日は朝一で会議があるんですよ」

秀子も同じように、宝玉を握り込む。今度こそ決着をつける。二人の女が考えている事は一緒であった。目の前にいるいちいちムカつくこの女をハッ倒す。秀子に至っては、当初の『アルバイト目的』から既に大きく脱線してしまっている。今は、目の前にいる堀田を殴り倒す事のみを考えている。人に頭を下げて生きるサラリーマンである普段の秀子なら考えられない事だ。

そもそも世の中には、暴力で解決できる事というのは少ない。あるにはあるが、それは一般人にはどうしようも出来ない、『法』や『権力』などの社会機構に捕らわれているから起こる逃れ得ない事象なのである。だが、目の前のこれは捕らわれない。権力や法や金や上下関係、これらに一切関係ない。獣が子孫を残すための闘争のようなもの。人間もとどのつまりは獣である。獣が前に進むため、生きるため、闘争して何の問題があるのだろうか？ 闘争は社会に捕らわれたりしないのだ

「正直言つて、貴女なかなかやるわね。このミッチー様をここまで追い詰めるなんて」

「お褒めの言葉どうもありがとうございます。貴女みたいな勘違いに言われても嬉しくないですけど」

お互い拳を固め、引き、対峙する。

「引く気は無いのね？」

「その言葉、そっくりそのままお返しします」

弓から矢が発射されるように、拳が放たれた。二人の拳は綺麗に直線を描き、お互いの拳を捕らえる。廃工場には、風を切る音と硬い物がぶつかる音が響いていた。次第に二人の拳は血で染まり、腫れ上がってきつつあった。何度も言うようだが、彼女らはスーツを脱げば只の人間、生身で殴り合えば、拳のほうに悲鳴をあげる。そもそも、魔法少女は長く戦う事を想定されていないのである。ましてや、銃撃特化タイプの秀子や、召喚師タイプの堀田なら尚更である。二人は確実に消耗しつつあった。

「さつさと死になさい、このクソメガネが！」

「貴女のような厚化粧に引くわけにはいきません！」

秀子の赤い拳が堀田の顔を捕らえ、彼女を吹き飛ばす。柱が砕け、粉塵があがる。コンクリートに突き刺さった堀田の体は、それから動く事は無かった。

「私は、何かを成してみせる。負けるわけにはいかないんです」

突き上げた拳は、廃工場の屋根の隙間から照らされる月の光を浴びて、鮮やかに赤く光っていた。秀子は勝ったのだ。それは、変貌を遂げた彼女の最初の勝利であった。

第三話『七人衆』（前書き）

天使が祈り、鬼が泣く。天が轟き地が軋む。我ら魔法少女七人衆、地獄の底すら生ぬるい。我らに挑む愚か者、一人残らず滅ぶべし。我らと争い望む者、誰ひとりとして許しはせぬ。それこそ最強の証、最強の義務。次回、『七人衆』。力こそ、彼女達のすべて。

第三話『七人衆』

3

暗い部屋だった。かすかに洩れる光が、ブラインドの隙間からのぞいている他はひたすらに暗い部屋だった。魔法少女協会所属の魔法少女、『ダブルトリガー』の金剛地は、季節に変わりなく身につける長いトレンチコートの襟を立て直し、自分の席に着いた。丸い形のテーブルの中心には穴が開いていて、外側には七の椅子があった。内ポケットからラッキーストライクの箱を出し、タバコを一本咥え、火をつけようとすると、まるで夜明けのように部屋が明るくなった。

「コンさん。ここは禁煙スよ」

同僚の魔法少女の赤羽春子が、頭を掻きながら部屋の入り口に立っていた。女子高生の癖に、相も変わらず制服にフライトジャケットというミスマッチ極まりない服装だった。

「ケチケチいわないで欲しいね。私は来たくも無い会議に一番乗りしてるんだ。タバコぐらいいいだろ」

「君、それは間違いだよ」

女性にしては大柄な緋色が、赤羽の肩を持ち、押しのけて会議室に入ってきた。こちらにも相変わらず巨女だ。しばらく会ってなかったから、多少は縮んでいたのではないかと金剛地は期待していたのだが、それはかなわぬ願いだったようだった。

「ルールだ。公共の場でタバコはご法度だ。喫煙所は会議室を出て右を突き当たりについてたところにある。そこで吸うといい」

緋色の慇懃無礼な物言いにイライラしたので、タバコに魔力を詰めて燃え上がらせることにした。汚い花火だ。魔法は感情を別のエネルギーにするものだ。感情がよんだら、魔力も淀むのだ。イラ

イラしていなければ、タバコは綺麗な花火になったことだろう。

「それでいい」

初めに注意した赤羽より満足げに、緋色は腕を組んだ。巨女は例外なく巨乳だともいいたそうだった。スーツの上からでも分かるその脂肪の塊をもいでやろうか。二人が席についているのを観察しながら、金剛地裕子はタバコの代わりのスティック付のアメを取り出した。喫煙を始めて四年ほど経つが、ここ数年タバコは値上がりし通して、禁煙も上手いかないばかりだった。

「今日の議題ってなんスかね」

赤羽がかわいらしいクマのマスコットの付いた携帯をかちかちやりながら呟いた。金剛地は、『会議をするので集合してくれ』としか言われていなかった。段取りが悪いのはいつものことだが、いい加減学習してくれ、といいたいくなる。

「おそらく、先日やられた堀田のことじゃないかしら……」

蚊が鳴くような声がしたかと思うと、巷でゴスロリ服と呼ばれている黒いフリルがシャーザーサラダの上のチーズのようにまぶされているコスチュームに身を包んだ女が、赤羽のショートボブから除くうなじをなぞっていた。幽霊みたいな青白い細腕には黒いリストバンドがしてあった。左手には、赤羽のストラップと同じクマのぬいぐるみがあった。赤羽のと違うところといえば、必要以上に包帯でぐるぐる巻きにされていて、血がにじんでいるところだが。

「な、なんスか！ いい加減にして下さいよ、江藤さん！」

「私たちの仲なのに、ひどいのね春ちゃん……」

江藤は赤羽を個人的にストーカーしている。最後に全員で顔を突き合わせたのは半年前だから、まだ懲りていないらしい。一度親も交えて金剛地が説教をしたことがあったのだが、江藤と赤羽は前世で心は結ばれながら、死別してしまった王子とお姫様だそうで、この世であつたのは間違いない運命なのだそう。金剛地はどちらがお姫様でどちらが王子様なのか聞きたくなかったが、江藤の目は淀んでいて、聞けば三日は開放してくれなさそうなので止めた。

「大体、自分は江藤さんとそんな仲になった覚えはないっす！」

「江藤さん、なんて他人行儀よ。本当にひどいわ……。私の事は様子姉さまって呼んでつていったじゃない……」

江藤の冷たい指先が赤羽の顎に触れたとき、会議室の扉が必要以上に大きな音を立てて開いた。三人の男女がカツカツ床を響かせていた。一人は魔法少女協会スカウト部門本部長の遠野命で、小脇にA4サイズの鞆を携えていた。ひよろりとした背の高いメガネをかけた男で、ちょうど緋色と同じくらいの背丈だった。もう二人は、そろいの小学校のものと思われる制服を着た少女二人で、こちらを省みることもせず、自分の席に座っていった。

「お待ちせいたしました、皆さん。これから、七人衆会議を始めたと思います。資料はお配りしますので、目を通していただけますか」

ぺらぺらと紙が空気を押し出す音をたてながら、A4サイズの紙はドーナツを回っていった。紙には『協会規則違反魔法少女討伐任務のお知らせ』とプリントされており、ホチキスで右上が止めてあった。

「では、私が概要を説明させていただきます。先日、魔法少女協会七人衆に数え上げられる堀田美津子女史がやられました」

「死んだのか？」

にやにやと口の端を歪める金剛地を尻目に、遠野は気まずそうに紙に目を落とした。こちらにも相変わらず煮え切らない野郎だ、と口にくわえたスティックを上下させる。金剛地の回りはむかつく奴しかいなかった。

「いえ、復帰はもうしています。大事をとって安静にしているように指示していますがね。堀田さんは知つてのとおり、七人衆の中でも格下です。が、このままでは示しが付きません。よって、七人衆の皆さんで、ターゲットの始末をお願いします」

「ちよつと待ちたまえ」

相変わらず腕組みしたままの緋色が口を開いた。

「相手が魔物というなら本部長の言うことも理解できる。……が、どう見てもこの資料にのっているのは人間。我々は人間に仇なす魔物を退治するのが仕事であり至上命題のはず。われわれは人間を相手にする気はない」

なるほど、巨女にしてはまともな論理だった。それに、人間相手にどうしたら勝ちになるかなどあまり考えたくない。最悪、殺さなければならぬだろう。

「そうっすよ。まるで自分たちがヤクザかなんかみたいっす」

すかさず赤羽も文句を挟んだ。実に不機嫌そう。尤も、その怒りの原因は自分の髪をくるくる指でこねくり回している江藤のせいかもしれないが。

「納得いただけないというなら、別に強制はしませんの」

甲高く、それでいて澄んだ声が会議室に響いた。七人衆最強にして、魔法少女協会の帝王の異名をとる“ホワイト・デビル”花井華乃その人であった。魔法少女としてのキャリアはまだわずか三ヶ月でありながら、魔物の討伐スコアや年棒もすでに歴代一位であるのだから恐れ入る。

「私と原野の二人がいれば、貴女方の手は借りませんの。もっと言えば足手まといですの」

「あ？ 喧嘩売ってんのか、クソガキ」

思わず金剛地の声が荒くなる。元々血の気が多いたちなのだ。

「喧嘩だなんてとんでもありませんの。七人衆だなんて大層な名前をつけておきながら、なんの役にも立とうとしない貴女方に小言をいっておりますの」

金剛地の飴のスティックが天を衝き、右手を軽く上に上げたかと思うと、軽くゆれた。その瞬間、愛用の魔銃ベレッタ92Fが飛び出し、手に収まっていた。銃口は花井の眉間に寸分変わらず向けられている。

「おもしれえ、ぶっ殺してやるぜクソガキ」

「ストップっすよ、コンさん！」

赤羽が慌てて身を乗り出すが、昆布が絡みつくように江藤がそれを制した。

「あらあ、いいじゃないの……。やりたいようにやらせてあげれば？ 私は春ちゃんさえいればなんだって良いもの」

赤羽はそんな江藤を振り払おうとするが、遅かった。金剛地のトリガーは二回も引かれ、赤い光線が銃口から飛び出す。轟音が鳴り響き、コンクリートの壁が崩れる音がした。『事故』では済まなそうだった。

「三流」

花井の声がする。

「私が本気でなくてよかった、と感謝したほうがいいですよ。貴女、三回は死んでいますの」

金剛地が一筋汗を流した。もちろん、冷や汗だった。手ごたえはあった。だが、なぜ自分は花井の獲物を後頭部に突きつけられているのか？

「魔砲エクセリオン。ぶっ殺してやる、なんてレディが使う言葉ではありませんの。月まで吹っ飛ぶ衝撃をうけてみますの？ 私は躊躇も後悔もしませんの」

何が月まで吹っ飛ぶ、だ。冷や汗を流しながら、金剛地は心の中で毒づいた。魔砲エクセリオンの射程距離は恒星間レベルである。撃たれて防御しても、体が残るかどうかわからないのだ。

「やってくれるぜ……。だが、三流ってのは気に入らんね。私はまがりなりにも一流を名乗るつもりなんだ」

「では、例の魔法少女を始末できるのですね」

原野が初めて喋った。その言葉は重かった。受ければ、自分は人殺しにならなくてはならない。金剛地にとってみれば、それはとても重い事実だった。

「もちろんだ。私は一流だからな」

その重い事実より勝るプライドを守るために、金剛地は首を縦に振った。

酒木原はコーヒーを一人すすっていた。秀子との待ち合わせに使う、さびれた喫茶店は、彼自身も気に入っていた。本来なら、秀子に対しての謝罪のみで済むはずだった。それだけで済めばよかった。「一体何なんですか。緊急にお知らせしたいことって」

何時の間にやら、いつものグレーのパンツスーツ姿の秀子が立っていた。死にそうな店主にコーヒーを頼むと、席に着いた。

「まずは謝らなくてはなりません」

「だから」

若干いらいらしていた。秀子はプライベートでも関係なく、回りくどいのは嫌いなのだ。

「一体何なんです」

「七人衆が動き始めました。このままでは大変なことになります」

「その七人衆というのは？」

かちかちとコーヒーカップが鳴る。中で満ちている黒い水がゆれていた。

「端的に言えば、魔法少女協会の上位七人を指します。本来なら、協会本部からの依頼と我々サポートスタッフの補助によって魔法少女の業務は滞りなく行われていきます　が、七人衆は自分の判断で魔法少女として活動できるのです」

「コーヒーはのどを燃やし尽くしながら通っていった。相変わらず話がまわりくどいし説明くさい。秀子としては、もっとコンパクトに要点をまとめて欲しい。そんな想いも、コーヒーは胃の底まで流していつてくれた。」

「その七人衆が、私とどんな関係があるんです」

「桜井さんが倒した堀田という魔法少女は、七人衆の一人『ナイトオブラウンド』だったのです。彼女を倒した桜井さんは、七人衆を敵に回してしまった」

事態が良く飲み込めない、というのが秀子の第一の感想だった。次に出てきたのが、だからなんだというのだ、というものだった。追突された車に、相手が悪いはずなのに『訴えてやる』と叫ばれた気分だ。そもそも、倒してやろうと堀田を倒したわけではない。完全に逆恨みもいいところだ。

「じゃあ、残りの六人が私を狙ってくる？ バカなんじゃないですか？ 私は何も悪くないじゃないですか」

酒木原は流れ出る汗をハンカチで拭いた。言葉に詰まっているのだろう、と秀子は思った。

「何も悪くなくても、彼女たちが悪いと思ったから桜井さんを狙うのです。七人衆はメンツと名誉を何よりも大切にしていますから」ひどい話だった。払ったら何とも言えない匂いをだすはた迷惑なカメモシに襲われたようなものだ。秀子自身は何も悪くないのに、よりによってこんな目に遭うとは。

「大体、酒木原さんのほうでなんとかならなかったんですか？」

「私はスタッフ部門のチーフです。七人衆に命令を下せるとすれば、スタッフ部門本部長の遠野氏くらいなものですからね……。とても私が口を挟めるようなものではありません」

酒木原は申し訳なさそうに、再び汗をハンカチで拭った。すでにハンカチはぐつしよりと濡れていた。あせっているのだろうか。

「幸いなことに、魔法少女の活動は通常任務以外に活動する場合は一時間と制限が決まっています。四六時中狙われ続けるわけではありません。彼女らにとってみれば、誰が上なのかを示す示威行為としての側面が強いでしょう。殺されることはないはずです」

酒木原の言葉は何の慰めにもなりはしなかった。当事者でないのだから、いい気なものだ。秀子自身は、この考えこそが身勝手にすぎるとしても十分に理解していた。だが、それだけ何かに当り散らさないとやっていられない。こんなことは誰も得をしないのだ。「それで、私はどうすればいいって言うんです？ まさかそれだけ伝えにきたって言うんじゃないですよね」

哀願に近い言葉だった。うつむいてしまった酒木原には、死刑宣告のように聞こえたかもしれない。

「すいません……私も何度も抗議しましたが、こればかりは何もできそうにありませんでした……。出る杭は打たれる、などとは言いますがここまでとは思いませんでしたよ。自分が情けなくて……。失礼」

酒木原にとつても、秀子と同じくらい頭にきている出来事らしかった。だが、いくら酒木原が怒ろうと、愚痴を吐こうと、当事者でないことはきまりきっているのだ。ここまで来てしまえば、秀子自身がなんとかするしかないという決まりは変わりそうになかった。

「こんな時で申し訳ありませんが、昼間送られたメールはもうチェック済みですね？ 今度は間違いなく魔物が出てきます。退治のほうよろしく願います。……うまく退治できてから一時間。それだけ生き残ってください。正直言つて、七人衆が何をしてくるか、私では及びがつきませんから……」

それだけいうと、酒木原はいつもよりゆっくりとその巨体を椅子から起こし、伝票をとった。

「おごりです。また会いましょう、桜井さん

第四話『大人』（前書き）

人は誰でも大人になりたがり、子供になりたがる。子供は未来に夢を見て、大人は過去に希望を見る。だが、それが何になる。子供でも大人でも、見なくてはならないのは現実以外に他ならない。次回、『大人』。たとえその現実が絶望で溢れていたとしても。

第四話『大人』

4

のたくった蛇、と形容すべき魔物だった。秀子が三人いても周りを図りきれないであろう蛇の腹に、何発も魔銃トカレフのエネルギーをぶち込む。トリガーを引く。普段のキーボードを叩く作業の何倍もやりがいがある。秀子は堀田と戦ってから、ブーツのかかるとに宝玉を仕込むことにした。協会としてもそれを見越しているようで、宝玉がちょうどぴったりはまる穴があいていたので、さして難しいことでもなかった。血管でも筋肉でもない、魔力の管とでもいうものをイメージし、魔力を足へ供給、宝玉が推進力へと変換し、秀子は飛ぶ。建築現場の鉄骨に絡みつく魔物が、秀子の視界一杯にひろがり、巨大な毒牙を見せつけるように口を開く。今度は、秀子の右腕へ魔力を供給、魔銃トカレフのマガジンにエネルギーが蓄積される。トリガーを引くと、最大エネルギーの巨大なビームが魔物の口へ放出され、蛇の体を蹂躪し、やがて爆散していく。秀子は再び足へ魔力を集中させると、推進力をコントロールし、うまく着地した。魔物が爆散した衝撃で、鉄骨がいくつか落下し、地面へ轟音を上げながら突き刺さった。

「お見事お見事、すげえ腕だ。とても新人にやあ見えねえな」

魔法少女が活動する区間に、一般人は入れない。理由はさまざまであるが、大半は協会が現場を監視しているからである。こうして秀子以外の声がする以上、秀子の脳裏に浮かんたのはたった一つの可能性だった。

「あなたが七人衆のひとり、ということですか？」

工事現場の組みあがった鉄骨の上で、小さな火が灯った。その火はすぐに消え、代わりに白い煙が漂うのがかすかに見えた。

「話が早くていいね。時間がないんで助かるよ。まあ、自己紹介でもさせてもらおう」

女は一瞬光に包まれると、瞬きが終わらない間に変身を完了させていた。秀子は橙色を基調としたコスチュームだが、この女のコスチュームはグレーをベースにしており、袖が長く広がった。特筆すべきは、白いマフラーが首にかかっていることだった。まるでイタリア映画のマフィアだ、と秀子は頭の片隅で不意に思った。

「私の名前は金剛地。下の名前は……まあ必要ないな。あんたが桜井秀子？」

「ええ」

金剛地は秀子を上から下までじろじろ観察した後、たばこをふかした。まわりつく煙を秀子はふりはらう。話している途中なのだから、たばこくらいやめればいいのに。秀子にとって喫煙者は例外なく忌諱の対象なのである。

「なんで私がここに来たのか、わかるか？」

「ええ」

「あんたには恨みはねえ」

「そうですか」

「あんた、私より十も年上なんだってな。だったらわかるだろう？ くだらねえしがらみのせいで、やりたくないこともやらなくちゃならねえ。それが大人なんだってよ。私にとっては『クソくらえ』ってやつさ」

金剛地のタバコの煙は、口から勢いよく吹き出るとすぐに夜空に消えていった。あたりには、なんとも言えない臭いが漂う。秀子にとっては嫌いな臭いだった。

「だがよ、私は一流なんだ。誰が何と言おうとそれだけは譲らねえ。一流だから、あんたを始末しなくちゃならねえ。OK？」

金剛地が両手首を振る。袖から秀子が見たことがない銃が滑り出て、両手に収まった。クロスされた両手の先に、漆黒の銃口がぼつかりとこちらを狙っている。

「奇遇ですね。私も銃を使うんです」

ようやく慣れてきた魔銃トカレフを向けると、金剛地はそれを鼻で笑った。それが何を意味したのか、秀子にはわからなかった。自信の表れか、自らの情けなさを感じたのか、それとも別の何かか。

「なんでそんなに余裕なんだ？ 自信でもあんのかい」

「……私には、『自信』なんてものがなんなのかわかりません。でも、私は何も成さないまま死にたくないんです。それだけです」

秀子はトリガーを引く。光弾が射出されるが、金剛地はそれを両手の銃で弾き、後ろへ飛ばす。おそらく宝玉の力なのだろう、地面をけり、鉄骨を吹き飛ばし、まるでヒョウのように動く。目で追えないほどの速さだった。秀子の放つ光弾はかすりもせず、後ろへそれ、地面に突き刺さっていた鉄骨へ命中しへし折れる。

「まだまだだな、ルーキー！ 今度はこっちの番だぜ、死んでくれるなよ！」

金剛地がそう叫ぶと、夜の空へと飛び出し、そこから雨のように青い光弾が降り注ぐ。まるでよけられない。秀子が取ったのは紫外線を防ぐように腕を目の前に出すことだけだった。痛い。昔、ラクロスの試合中にこけて骨折をしたことがあったが、その時とはまるで違う。体中で骨がひび割れているような衝撃だ。トリガーを引き、光弾を光弾で薙ぎ払い、雨に一筋の道を作り出す。が、いない。今の秀子ではとらえることも難しいのかもしれない。そう思った次の瞬間、急に光弾の雨がやんだ。あたりをきよろきよろ見回す。骨がきしんでいるような気がする。だが、周りには誰もいない。金剛地はどこにいったのか？

「ここだよ、ルーキー」

秀子は何か言う前に両手をゆっくりあげていた。金剛地はいつの間にか後ろへ回り込み、後頭部に銃を突き付けていた。

「チェックメイトだ。あんたの頭は今トマトとおんなじだぜ。私がトリガーを引いたら、当分ミートソースは食えないな」

秀子はゆっくりと両手を挙げ、トカレフをその場に落とした。昔

見た映画のシーンにどこことなく似ているような気がした。このまま頭を打ち抜かれてしまうのだろうか。酒木原は『死ぬことはない』とは言っていたが、とても信じられなかった。あっけなく死ぬ。不思議なことに、特に何も感じない。焦りも恐怖もどこかに置き忘れてしまつて、思い出せない。もしも秀子の首がもつと下に向けることができたなら、情けないくらいに足が震えているに違いなかった。「怖いかい、ルーキー」

金剛地のそんな言葉が、ハンマーのように秀子の鼓膜を叩いた。頭のなかで思考がピンボールをはじめ、決してひとつにまとまることなくそこらじゅうを跳ね回った。

「ただ、もう時間なんだ。残念なことにな」

金剛地が銃を降ろす。秀子の腰に手を回すと、口の広い左袖をまくつた。秀子の知らないブランドの腕時計が、魔法少女協会の規定時間が過ぎてしまったことを示していた。

「ちよつと聞きたいんだが」

「……なんでしょう」

変身を解いた酒木原は、なんとなく解放されたような、そんな顔をしていた。

「あんた、酒は大丈夫かい」

雰囲気のいいバーだった。あまり知名度がないのか客は入っていなかったが、照明も実にちょうどよく、明るくもなく暗すぎない。カウンターも小奇麗だが、歴史を感じるつくりだった。もしも恋人がいるのであれば、こういうところに連れて行ってもらいたいものだ、と自虐のように秀子は思った。金剛地はマスターに手慣れた様子でマティーニを注文すると、秀子をカウンターへ座らせた。

「何かカクテルにしてもらうかい」

「ええ。あんまり強いのは苦手なんです」

秀子はあまり酒が強い。接待や飲み会では下戸で通してこまかしている。最近はハンドルキーパーの役を買って出ることによりスムーズにごまかせるようになったが、新入社員のころはどう断るか理由を考えるのに頭をひねり倒していたものだった。

「マスター、実は仕事の話なんだ」

金剛地がしわを刻み付けた笑みを浮かべるマスターにそういうと、マスターの顔が一瞬でまじめなものに変わり、表へ出て行った。看板がOPENからCLOSEへとひっくり返った。

「私はこの常連だね。マスターには世話になってる。こうして貸切も自由自在さ。おまけにどんな突拍子もない話も、マスターは聞き流してくれる」

マスターは秀子にカシス系のカクテルを作ると、そそくさと店の奥まで引ッ込んで行ってしまった。金剛地は秀子の想像以上にこの店に世話になっているようだった。

「……いったいあなたは何者なんです？」

「あんとと同じ魔法少女さ。……同時に、今はあんとと同じ、なんでもない一般人でもあるわけだ。タバコ、いいかい？」

金剛地はコートの内ポケットから真新しいタバコの箱をのぞかせると、秀子の返事も聞かずに一本取出し、火をつけた。暗くもなく明るくもないバーの中に、小さなイルミネーションが灯り、好みではない臭いが漂った。

「いったい何の用なんです。私を殺すんじゃないんですか」

「さつきも言っただろ。大人は嫌なことやらなくちゃいけない。私はもうこの商売を始めて十二年も経つ。私がやらなくちゃいけないんだ。そうじゃなけりゃ、下のやつらに尻拭いをやらせる羽目になる。理由をつけてやらなくてもいいってんなら、それに甘えるだけさ」

金剛地の顔は暗かった。それは照明のせいではなく、彼女の抱える感情のせいなのは間違いなかった。

「優しい人なんです」

「よせやい。殺される側の人間が言うことじゃないぜ」

マティーニを金剛地がある。中のオリーブがころころ揺れた。

「ふつう、殺す側の人間はそんなこと言いませんよ、たぶん」

名前も知らない赤いカクテルは、光を反射しながらゆらゆら揺れていた。覗き込んだ秀子の顔はぐにやぐにやに歪んでいた。

「大人になるつてのは嫌だねえ」

金剛地は灰皿にたばこを這いつくばらせると、またマティーニをあおった。たばこの火はまだしぶとくくすぶっていた。

「……私は、探偵になりたかったんだ」

「シャーロック・ホームズとかですか」

「バカ言え」

新しいタバコに火が灯る。

「あんなクソインテリの何がいいんだか。マイク・ハマーとか、フイリップ・マーロウとかしらねえか？ ああいうタフな探偵に憧れてたんだ。ま、一応探偵社に勤めちやいるんだが、なかなか調査にや出してもらえないんだ」

「夢があるんですね」

「あんたはないのかい」

ふと考えてみたが、これだと思うものは秀子のなかに存在しなかった。それが夢を持つ金剛地と比べてしまい、なんだか情けなく思えてしまった。自分のこれまでの人生がからっぽで、そのからっぽな暗い暗い穴を覗くのはとても勇気がいることなのだ。

「金剛地さんは、人生が充実してるんでしょうね」

皮肉めいた言い方だった。もしくは、嫉妬を含んだともいってもいいかもしれない。それほど、秀子は惨めだった。

「人生が充実ね……。さあな。あんたならわかると思うが、大人になるほど隣の芝は青く見えるもんさ」

たばこの煙が漂い、マスターが残したジャズのCDの落ち着いたBGMがしばらく場を支配していた。

「逆に言わせてもらえば、私はあんたがうらやましいのさ。魔法少

女として、すげえ才能を持つてる」

「どうだかわかりません。現に、あなたに手も足も出なかったです」

金剛地はにやりと口をゆがめて笑った。

「そうだな。才能は結果に直結しねえ。剣士が丸腰じゃあ意味が無い」

「使っているのは銃ですが」

「なんだっていいさ。あんたは天才だ。だが剣がない」

「意味が分かりませんよ」

カクテルが喉を通ると、秀子の精神は高揚を始めた。ガソリンが入っていったら、車はこんな気分になるのだろう、と秀子は頭のどこかと思った。

「くだらねえことは考えるな。あんたは強いし、これからいくらでも強くなる。……私こそ、くだらねえプライドにしがみついているだけなのかもな」

金剛地はたばこを灰皿に押し付けると、席を立った。どうやら、用事は済んでしまったようだった。

「……おっと」

金剛地は入り口を開く前に、こちらに向き直った。

「なあ、ちよつと頼みがあるんだ」

「なんです」

「何、別に大したことじゃねえさ。握手しようってだけだ」

秀子が振り向くと、金剛地は右手を差し出していた。ここまでされて断るほど、秀子は人が悪くなかった。応じない理由もまた思いつかない。金剛地の手は暖かった。手が暖かい人は心が冷たい、などと聞いたことがあったが、金剛地はなんとなくそれには当てはまらないのではないか、と秀子は思った。ただ、自分のことは考えなくなかった。

「ありがとうよ。じゃあな、さようならだ」

扉は音を立てながら夜の風を運んできた。金剛地はそれにひるみ

もせず、力強く去って行った。秀子は彼女が羨ましかった。心が温かくて強い人間に、初めて会ったような気がしたのだった。

第五話『涙』（前書き）

赤ん坊は涙を流しながら生まれ、老人は涙に包まれながら死んでゆく。ならば、大人はどうなのか。大人の涙は許されないというのなら、誰かのために涙を流すことも許されないのだろうか。次回、『涙』。それでも流れる涙を、受け止めるのは、誰か。

第五話『涙』

5

それから三日ほどは協会からの連絡はなく、金剛地以外の七人衆とやらも一向に現れる気配はなかった。平和であることは間違いなかったが、秀子にとっては苦痛だった。一度人に必要とされると、人間は何度も必要とされたいと願うものなのだ。それは秀子にも確実に当てはまった。職業人としての秀子は、いわゆる中間管理職だ。頼られることなどごまんとある。だがそれは、大半が秀子という人間そのものに期待されていることではなく、上司という役割に依存するものだ。秀子は自分という人間そのものに頼られたいという誰しも持つ欲に押しつぶされていた。

「桜井君」

課長の大川が見とがめたのか、呆れ顔で秀子を呼んだ。できるだけしゃきつとした顔にしようと努めるが、そもいかないうだった。

「最近、勤務中にぼーっとしていることが多いようだ」

「はい。申し訳ありません」

「君は係長だ。下からの目もある。仕事に身が入らないのは困るな」大川は話が分かる男性だった。秀子が係長になった時も、的確なフォローを入れてくれた。あまり人付き合いが得意でない秀子にとって、大川のように気遣いのできる上司の存在は心強い。

「悩み事があるなら遠慮なく言ってくれ。現在進めているプロジェクトのことであれば、なおさらだよ」

「大丈夫です。その、最近寝不足なもので」

嘘だった。むしろ魔物と戦うようになってからというもの、軽い運動になっているのか寝付きがよくなっている。大川は気持ち眉毛を上下させると、まあ何かあればきちんと言うように、と繰り返し

た。

酒木原と初めて会った喫茶店には、いつもどおりよぼよぼのマスターがひやひやする手つきでコップを磨いていた。最近、酒木原とも会っていない。メールで事務的な連絡がくるくらいだ。秀子としては別にそれでも問題はなかった。むしろ、煩わしくなくていい。マスターに、コーヒーとフレンチトーストを注文する。平和だが、退屈な昼休みだ。その時、ドアベルが鳴った。客が入ってきたのだ。路地裏のひんやりとした風が吹き込んだ。秀子は、なんとなくそれが気に入らなかった。入ってくる人間まで、冷たいような気がしたのだ。

「いらっしやい」

マスターがしゃがれた声であいさつをする。入ってきたのは、秀子より一回り以上年下の少女だった。顔つきはどちらかと言えば精悍なイメージだ。それなのになぜ年下と判断したかというと、セーラー服を着ているからだだった。それだけならまだ良かったのだが、その上にフライトジャケットを羽織っているのだ。

「ここ、いいツスか」

少女は秀子の座っている目の前の席を指を差した。嫌な予感があった。席ならいくらでも余っている。客は秀子以外いない。それなのに、秀子の目の前に座るというのは、何か用があるに間違いなかった。

「……どなたです？」

少女は、ムスツとした顔をしている。YESとは言っていないのに、勝手に席に座ってきた。テーブルに置いた携帯電話には、可愛いらしいクマのマスコットがついていた。

「桜井秀子。間違いないツスか」

「……私の名前です」

「自分の名前は赤羽ツス。察しの通り、七人衆の一人ツス」

赤羽はよく通る声でオレンジジュースを注文すると、改めてこちらに向き直った。若い故にまっすぐな瞳だった。何が悪いわけでもないのに、秀子は視線をそらしてしまいそうになる。

「なんの御用ですか。魔法少女協会の規定時間はまだのはず。攻撃しに来たというわけではないでしょう？」

「その通りッス。自分はあるたを攻撃しに来たわけではないッス。かと言って敵意を持っていないというのも嘘になるッス」

「以前、金剛地さんという方にお会いしました」

一瞬、彼女のまっすぐな瞳が曇ったのを、秀子は見逃さなかった。別に観察力がずば抜けているわけではない。自分にはないものを持つ少女に対する嫉妬のような物だ。憎んでいるものほどよく観察できる。

「彼女は、協会からの命令が不服なようでした。……あなたはそうではないようですが」

「……コンさん、いや金剛地さんはそんなことを言っていたッスか」「ええ」

熱いコーヒーが喉を焼き尽くす。冷えた精神の秀子にとっては、それが生きている確認に感じられた。赤羽はどうだろうか。彼女の若い精神は、オレンジジュースが満たしてくれるのだろうか。

「コンさんは」

オレンジジュースの氷が揺れる。それは、何かが碎ける音に似ていた。もしかしたらそれは、秀子の運命が壊れた音だったのかもしれない。

「死にました」

「連絡を頂いたときは、何を考えているのかと思いましたの」

「考えてることは結構簡単だぜ。『お前をぶっ殺す』それだけさ」

使われていない夜の採掘場を、星と月のみが青白く照らしていた。

そこに立つ二人の女。一人は魔法少女『ダブルトリガー』の金剛地。もう一人は、同じく魔法少女『ホワイトデビル』花井。お互いすでに変身は完了しており、準備は万全だった。

「貴女、イカれていますの」

花井は侮蔑の視線を金剛地に送ってきていた。当然なことだろう。花井は組織に忠誠を誓っている。自分のような乱暴なはみ出し者は一生涯理解されないだろう。別にそれでも構わないのだ。どうせ、金剛地自身も花井のような忠犬は理解し得ない。お互い分かり合うことなど、出来はしないのだ。

「褒め言葉だぜ、お嬢さん」

両手を顔の前に持つてくると、勢い良く振る。袖から魔銃ベレッタF92と魔銃グロックが飛び出し、疾風の如く花井に光弾が飛び出していく。花井はと言えば、魔砲エクセリオンを自分の前方で回転させた。魔砲エクセリオンは本来はステッキであり、先に砲塔がくつついているというシンプルなデザインである。魔法少女のもつ武器は、その多くが魔力を放出するための媒介に過ぎないが、花井の場合それは顕著である。おそらく、彼女ほどの膨大な魔力の持ち主であれば、たとえ手で円を作るだけでも魔力を物理エネルギーに変換可能だろう。しかし、すべての魔法少女は、その変身後のコスチュームに組み込まれた魔力変換システムを通して、物理エネルギーへの変換を行なっている。花井の場合、自身の才能とともに、このシステムを通すことで、単純計算で二乗のエネルギーを放出することも可能なのだ。一方金剛地は、年齢的にベテランであるとはいえ、彼女ほどの才能はない。おそらく、先日戦ったあのルーキーよりも才能はないだろう。敵うわけがない。放った光弾が回転させたエクセリオンに弾かれながらそれを痛感する。

「どうしたんですの、一流。私に勝つものではありませんの？」

「言われなくても！」

金剛地が大地を蹴る。同時に、ブーツに仕込んだ宝玉にありったけの魔力をチャージし、一気に放出。加速。接近。魔銃グロックの

銃身を持ち、モードを接近戦モードに変える。銃底からスパイクが飛び出し、殴る。エクセリオンが止める。弾く。

「くそつたれ！」

花井がエクセリオンを振るう。だが、もともと接近戦に特化しているわけでもないのに、守勢に回るほかない。魔銃グロッグを手の中で回転させ、トリガーを引くが、光弾は花井を逸れていった。エクセリオンが手首に打ち込まれていたのだった。激痛が走る。魔銃ベレッタが転がっているのが見えたが、次の瞬間再び激痛とともに見えなくなった。今度はエクセリオンが金剛地の顎を打ったのだ。金剛地は倒れる。視界に星が広がった。星空だけが金剛地の視界を支配していた。

「終わりですの」

エクセリオンの砲身が、またも金剛地を捉えていた。

「私もヤキが回ったもんだ。後輩に二回も油断を取るようじゃおしまいだぜ」

「私もそう思いますの。……貴女、分かっていますの？ 度重なる協会への裏切り行為。そして私に大しての私的な戦闘行為。……七人衆の一人でベテランだからといって、もはや擁護は出来ませんのそれに」

「それに？」

「貴女はなぜ笑っていますの？」

金剛地は笑っていた。ふてぶてしく笑っていたのだ。今から、死ぬというのに、そのことを分かっているはずなのに、笑っていたのである。

「さあね。だが、少しおはなしをしようじゃないか。どうせ死ぬんだ」

「長くは待ちませんの」

「何、大したことはないさ。……遠野の野郎は何をしようとしてる？」

一瞬、花井の瞳が泳いだ。いくら大人ぶっていても、中身は九歳

の子供だ。大人に隠し事などできない。

「教える義理はありません」

「そうかい。……だがな。私は全部知ってる。おそらく協会は、お前を使い潰すだろう。……それでもいいのか、お嬢ちゃん」

「無論ですの。私は協会のために生きて、協会のために死ぬ。そのことに誇りを持っていますの。私から見れば、あなたのほうがわがままな『お嬢ちゃん』ですよ」

「そうかい。なら話は終わりだ」

花井の指が、トリガーに近づく。嫌に時間がかかるような気がした。それは金剛地の脳が勘違いした結果か、花井のせいかは分からない。ようやくトリガーに指がかかるのを見て、金剛地は目を閉じた。

「……タバコ、吸い忘れた。くそつたれ」

何でもない風を装うのがこんなにも難しいものか、と秀子は思った。コーヒーを口に運ぶ。ソーサーがかちかちと音を立てる。

「前代未聞ツス」

赤羽の言葉が詰まるのが秀子には良くわかった。

「コンさんが死ななきゃならないなんて、自分は、自分は信じられないツス」

赤羽はそのまっすぐな瞳から発する視線をテーブルに落とした。

彼女と金剛地は、おそらく秀子以上の仲だったのだろう。こうして、きちんと感情を制御できているのが不思議なくらいだった。泣き叫んでいてもおかしくない。一晩酒を飲んだだけの秀子ですら、この世に金剛地がもう存在しないなどと、とても信じることができない。「でも、事実なんス」

赤羽はバックから黒い塊を取り出す。それは、金剛地が使っていたものと思われる銃だった。彼女からこの銃で撃たれたのだから、よく覚えている。

「これを受け取って欲しいッス」

「これは？」

「魔銃ベレッタ……このマスター、大丈夫ッスか？ まさか聞いてるわけじゃないんスよね」

「大丈夫ですよ」

「話を戻すと、コイツはコンさんが使っていたモノッス。アンタは、銃を使うと聞いているッス。だから、アンタに持っていてもらいたいッス」

金剛地は死んだ。つい何日前に、彼女からこの銃で撃たれ、応戦し、一緒に酒を飲んだというのに。あの日握手した時の暖かく力強い手を持つ彼女は、もうこの世に存在しないのだ。

「……受け取れません」

「なんスって？」

「私には、恐らくそれを受け取る資格も、価値もありません」

「何を言ってるんスカ」

「怖いんですよ。……死ぬのが怖いんです」

そういうと、秀子は自分の手のひらをテーブルの上に差し出した。手のひらは汗でびっしりと濡れていた。

「だいたい、その魔銃を受け取ったとして、私に何をしろというんです？ 貴女達が私にしたように、誰かに報復をしろとでも？」

赤羽はバツが悪そうに再び視線を落とした。分かっていた。秀子は今、余計な事を言い放っているということを。それが、赤羽を困らせているということを。そして、それが彼女に失望すら与えているということ。

「自分は……自分は別にそんなつもりじゃなかったッス。でも、アンタの言い分も最もッス」

赤羽はまっすぐな瞳に失望の色を浮かべながら、立ち上がった。彼女がしたい話は、どうやら全て終わってしまったようだった。

「……今日した話は、協会にはオフレコにしてほしいッス。で、あなたはもうこの世界に関わらないほうがいいッス」

「……どうしてです」

「戦争が始まるッス。……今言えるのはそれだけッス」

カフェには暑いはずなのに冷たい空気が再び吹きこみ、秀子のもとにはコーヒーだけが残された。

仕事が終わると、秀子の足はいつか金剛地と共に酒を飲んだ、あのバーに向かっていた。相変わらず店には人が少なかった。平日の火曜日だったので、そのせいもあるのかもしれない。

「いらっしやい」

マスターは笑顔であいさつをする。秀子は、あいさつをうまく返すことができなかった。彼は、金剛地の死を知っているのだろうか。それとも、客の死には興味など無いのだろうか。

「今日は金剛地さんは一緒でないですね」

あまりにもタイミングがよかったので、秀子は少し面食らってしまった。それに、注文したはずのないあの時のカクテルが、すでにカウンターに置かれていた。

「最近、いらっしやらないですよ。いつもなら、仕事帰りに必ずといっていいほどこちらに寄られて飲んでいかれるのですがね」

名前も知らない落ち着いたジャズが、店の沈黙をかるうじて防いでいた。言葉が出てこない。涙も出てこない。それは、秀子が大人であることの証とともに、失ったものの多さを物語っていた。

「……いつか、また来ますよ、彼女」

「そうですか」

マスターは再び笑顔を浮かべ、グラスを拭き始めた。秀子にはそれがとてもありがたく思えた。かるうじてせき止めている感情が、一気に吹き出してしまいそうだったからだった。

第六話『再会』（前書き）

幸せの形は様々ある。どのような形であれ、人は幸せを所有している。だが、幸せが分からない女がいる。何が不幸で何が幸せか、それを知ることができないのは、同じ思考の仲間だけだ。次回、『再会』。この世界には、認めたくない友情もある。

第六話『再会』

6

それから数週間は、平和な日が続いた。それは秀子にとって退屈な日々であることの裏返しであつたし、同時に人生に対する漠然とした焦りの日々でもあつた。別に、億万長者になりたいとか、今更女優を目指したいとか、夢見がちな少女のような妄想を実現できないことに焦っているのではない。ただ、何をするわけでもなく過ごすこの日々に対して、不安と焦燥を感じているのだ。それは、金剛地が死んだという知らせを受けてからというもの、日増しに強くなつていった。

「桜井君桜井君、なんて予約してあるのかね」

大川が大声で秀子に尋ねる。考え事をしていたせいか、またも反応が遅れてしまった。今日は会社の飲み会で、秀子は酒がほとんど飲めないため幹事の役を引き受けることになっていた。

「六道商事の桜井で予約してありますので、その旨を伝えれば大丈夫です」

堅物でこそないものの、真面目な大川がウキウキと歩を進めるのを見て、秀子は自分を不安に思つた。自分は、結局何もできないのではないのか。こうやってどこか他人と疎外感を感じながら、ただ何もせずに老いていき、一人ぼっちで死んでしまうのではないか。だが、一人ぼっちで死ぬのも、今すぐ金剛地のように死んでしまうのも躊躇われた。結局、わがままなのだ。そんなわがままな自分のままでは、何も出来ないことくらいは分かっている。

その時だった。秀子は突然、見えない手で肌をなでられたような気がした。魔力の反応である。それも、かなり強い。恐らく、かなり大型の魔物が近くににいるのだろう。

「どうしたのかね？」

「課長、実は会社に忘れ物をしました。すぐに戻りますので、先に始めてください」

大川の静止も聞こえないふりをすると、秀子は夜の街をかけ出した。通常、魔物の発する魔力は微々たるものである。魔物は魔力を、自分が存在するためのエネルギーとして常に消費している。もちろん、負の感情の供給がそれ以上であれば、魔物が強大になる速度も早い。最も、魔物は強大になる前に魔法少女協会によって討伐される。通常なら、付近に漂うほどの魔力を発することのできるほど強い魔物は存在し得ないはずなのだ。なぜなら、強大になる以前、つまり魔法少女達に感知される前に協会に発見されるのだから、強大になりようがないのだ。

「……なんてこと」

繁華街の中にある、普段はライブ会場にも使われる大きな広場。そこに、巨大な犬型の魔物が存在していた。魔物はどうやら食事中のようだった。ナイフどころの騒ぎではない巨大な牙の間から、人の下半身がぶら下がり、やがてちぎれて落ちていった。こいつは人を食っている。魔法少女は、誰もいない。ここまで大事になっているにも関わらず、である。秀子はビジネスバッグを開けると、お守りの魔銃トカレフを取り出し、握った。手が震える。金剛地が死んだ知らせを受けてからというものの、一度もトリガーは引いていない。だが、引かなくてはならない。ここまできたら、秀子も食われかねない。

「変身」

呟く。二秒で変身を終えるはずのコスチューム……だが、変化はない。なんとも呟く。何も変わらない。そんなバカな。そのうち、食事を終えた魔物がこちらを向く。確実に、次は秀子を食うつもりだろう。足がすくむ。変身もできず、トリガーガードに指をいれることすら叶わない。全身を蟻が駆けまわるように、恐怖が全身を走った。

「カリバアアアン！」

その時だった。魔物の首に、巨大な泥の剣が突き刺さった。聞き覚えのある甲高く、そして不愉快な声。魔物はひるまず、ぶるると身を震わし、剣を跳ね返す。思った以上に強靱な皮膚のようだ。「全く、他のやつらは何してんのよ！ それにしても、この私が一撃でやれないなんて、おかしいわ！」

「貴女は……堀田さん！」

巨大な泥人形を操りながら、愚痴をはく女が一人。かつて初めて秀子と戦い、そして敗れた魔法少女、堀田三津子その人だった。

「私は魔法少女ミッチー様よ！ ぶっ殺すわよ！ っていうかアンタ、ルーキーじゃない。こんなとこで何してんのよ、尻餅なんかついちゃって」

「貴女こそこんなとこで何を……」

いつの間にか尻餅をついていた秀子を見下すように、堀田はふふんと鼻で笑った。

「見てわかるでしょ？ アンタにぶちのめされて入院して、今日退院してきたのよ。ま、正確にはもとかかるところを無理やり出てきたの。あんなところ、自由じゃないわ」

くすんだ色の金髪が夜風になびく。今の状況で、これほど頼りになる者もいないだろう。秀子はいまや変身もできないのだ。一般人と同じなのである。

「まあいいわ。アンタも変身しなさいルーキー。このミッチー様と一緒にあの犬っころをぶちのめすわよ」

「……それが、なぜか変身ができないんです」

ふーん、と堀田は呟く。特に焦りも心配もない。彼女にとって、自分以外の人間などおまけにしか過ぎないのだろう、と秀子は思った。元から一人で戦うつもりだったに違いない。

「ま、死なないように隠れてなさい。このミッチー様が、戦いのイロハを教えてやるわ！ やーっとおしまい、ロードナイト！」

泥の騎士が再びカリバーンをふるう。犬は想像以上に力が強い。巨大なナイフのような牙で噛み付く。だが、このロードナイトは泥

で出来ているのだ。全くの無駄である。倒そうとすれば、ロードナイトでなく堀田を倒すか、ロードナイトを欠片残さず吹き飛ばすしか無い。それは秀子が一番良く知っていることだった。

「ジャーキーの代わりよ。カリバーンでもしゃぶってなさい、犬っころ！」

カリバーンが犬の喉を貫く。犬は断末魔の叫びをあげると、足元からぼそぼそと崩れ始め、やがて霧のように消えていった。同時にロードナイトも泥から砂へもどっていき、消えた。そこには、魔法少女が二人残った。どうやら、彼女に話を聞く必要がありそうだった。

「一体どういう事なんです。いままでの協会なら、こんなに魔物を強大にすることはありませんでした。それに、スタッフの方とも連絡は取れないし、私は変身もできない。異常事態ですよ」

「さあね。仮に知っていたとしても、あんたみたいな腑抜けに教えるつもりはこれっぽっちもないもの」

堀田は秀子に軽蔑のまなざしを向けると、そのままそっぽを向いた。

「……どういうことです」

「そのままだの意味よ、ルーキー。あんたは何かを成したい。だから死ねない。そんな事をほざいてたじゃない。そんな事をいつてたあんたが、あのていたらくとはね。ここ何週間で何があったのか知らないけど、心の底からガツカリよ」

心臓を抉られたのではないかと思うほど、どきりとした。それほど堀田の言葉は核心を突いていた。私は確かにそう決意したはずなのに。

「結局のところ、安っぽい決意だったってわけね。ほんとにガツカリよ。そうやって今まで何もかもから逃げてきて、それでまだ逃げようって事なのね。あんたみたいなのにやられて恥ずかしいっらないわ」

「貴女に何が分かるんです」

秀子がポツリと呟いた。

「何よ」

「私は、どう生きていいか分からなかった。小さい頃から真面目でおとなしくて、友達からもそう見られてて。でも、要領は悪くて勉強も嫌いで、人付き合いも苦手だった。それなのに、自分なりに一生懸命に生きてきて、それでも今までの人生に何も残ってないことに気づいたとき、自分がどれだけ惨めだったかわかる？ 私には、もう時間すら残ってない。若い人達が『これからこれから』なんていう根拠のない慰めすら私には許されない。じゃあ、すべて諦めて何も無いように生きて行くのがいいじゃない。だって、死んでしまふよりましでしょう？」

涙がこぼれているのが、自分でもわかった。恐らく、ひどい顔をしているのだろう。メガネの奥で自分のすべてが溢れて滲んで、堀田の顔すら見えない。彼女は、私を笑っているだろうか？

「あんたのことなんか私は知らないわ。だって私はあんたじゃないもの。それに、過去は過去でしょ。そんなこと気にして、これからの未来から逃げてどうすんのよ」

堀田は秀子の肩を抱えると、ベンチに座らせてくれた。彼女にも、人として最低限の良心は残っているようだった。それが今の秀子にはありがたかった。

「それに、死んでしまうつてあんたね。何もしないことは死んでるのとおんなじじゃない。あんた、自由でしょ？ そりゃスーツ着てるから働いてるんでしょうけど。私みたいにニートになれなんて言わないけど、それでも一人身な分身軽で自由じゃない。なんでも出来るわ」

「……もしかして、自由でいたいから一人なんですか？」

「そーよ。実は私バツイチなのよ。結婚ってどんなもんなのかってしてみたんだけど、あんまりにもめんどうだから離婚してやったの。だって、何かにつけて一緒にいなきゃいけないなんて、全然自由じゃないわ」

それから数分、何を話すわけでもなく、うら若いとはいえない年のいった女が二人、公園のベンチに腰掛けて過ごしていた。その間も秀子の涙は止まらなかった。わだかまりという名の巨大な氷が溶けて、それがひたすら流れているようだった。それがようやく止まった時、秀子は堀田に話しかけた。

「堀田さん」

「ミッチーよ。一体なんなの」

「貴女、七人衆の一人ですよ。金剛地さんってご存知ですか」

「そりゃあ、よく顔は合わせるからね。スカしたやつであんまり好きじゃないけど、結構イイやつよ」

「……彼女が死んだのはご存知ですか」

堀田が少し体を震わせたのが、秀子にはわかった。それが、彼女の動揺を表しているということも分かった。おそらく堀田は、入院してから情報をもたらっていないのだ。

「……嘘でしょ？」

「私は彼女に一度しか会ったことがありませんが、それでも嘘だと思いました。ですが、事実です。七人衆の赤羽さんという方が伝えてくれたんです」

再び、沈黙が二人の間に流れた。夏の夜だというのもあるのか、妙に空気が重く感じた。流れた汗はどういう汗だったか分からなかった。

「……バカみたい。死んだら、意味ないじゃない。ほんと、バカよ、あいつ」

堀田の目からは、涙が流れていた。秀子と同じ涙であろうことは間違いなかった。やがて、おもむろに堀田は立ち上がった。

「あんた、真実を知りたくない？」

「真実？ 真実って一体何なんです？」

「金剛地が死んだのも、スタッフと連絡が取れないのも、魔物が放つて置かれているのも。恐らく、すべてひとつの理由で説明がつくわ」

すでに夜十時を回り、秀子は大川に詫びの電話を入れ、このまま帰社することを伝えた。堀田は、いつの間にか缶コーヒーを買ってきて飲んでいた。秀子の分は無いようだった。彼女らしいといえばそうだろう。

「あんだ、赤羽から何か聞いてないの？」

「特には。……ですが、戦争が始まるとかなんとか言っていましたね」

赤羽は秀子に確かにそう警告した。同時に、魔法少女の世界から離れる、とも言っていた。

「なるほど。……結論から言えば、それはマジよ。本当。魔法少女同士で殺し合い……つまり戦争をしているの。だから、いくら強くても普通の魔物なんかみんな見向きもしない。自分がすべてってこと」

驚きはしなかった。秀子にとって、いまいち自分のことのようには思えなかったからだった。それに、これまで様々なことに巻き込まれてきた秀子にとって、今まで以上に現実味がないのも原因だった。

「……一体、何のために戦争なんかしてるんです？」

「あんだ、年棒いくらのなの」

「……確か、五千万ですね」

「なかなかやるわね。私は結婚前は一億二千万ってところよ。……で、年棒はスタッフ部門とスカウト部門の査定によって決まるの。……でも、スタッフ部門はともかく、スカウト部門は現場に出てくることはまず無いわ。それじゃあ、スタッフ部門だけに査定の特権があるようなものよね。スカウト部門には何のメリットもない。それじゃあ、組織ってのは回らない。あんだにはよくわかるでしょ」

確かにそうだ。同じように仕事をしているのに、権限に差がある

ようではとても組織は回らない。そんなのは秀子自身もごめんだ。

「……堀田さん、意外と常識あるんですね」

「ミッチーよ！ いい加減ひねり殺すわよ？ それにど失礼じゃないの。まるで私が非常識な女みたいじゃない」

実際そうだと思うが、と喉まででかかった言葉を、強引に体の奥に押し込んだ。

「それで、その年棒の査定が何だっけ言うんです？ 戦争と何か関係があるんですか？」

「大ありよ。……協会は、魔法少女の変身システムにある仕掛けを施したの。それは協会側からコントロールすることで、自由に発動できる。ただ、それは魔力による変身システムへの負担が大きくてずっと連続して使えるようなものじゃないっていう欠陥はあるけどね」

だんだんとイライラしてきた。この女、どうも話が回りくどい。なんでも言うようだが、秀子は回りくどい言い方はあまり好きではないのである。

「だから、それはなんなんですか？」

「特定の魔法少女を魔物に見せる装置。簡単に言えば幻覚装置ね。スカウト部門はそれを使って、意図的に協会規則違反魔法少女を生み出している。あんたを、私が襲ったようにね。もし私がやられたら、あんたは他の魔法少女に喧嘩を売ったことになる。私があんたを倒しても同じ。気に入らない魔法少女を消すにはちょうどいい。それでも生き残った魔法少女を」

「査定アップのためのターゲットにして狙わせるわけですか」

「そう。それが戦争ってわけ。この装置の実験体が私だったのよ。もともと協会からは嫌われてたからね。面識もないあんたを狙ったのはこのせいよ。恐らく、金剛地はこのからくり気づいたから殺されたんでしょうね。あいつ、探偵の真似事好きだったから」

なんということだ。金剛地は秘密を知りすぎたために消された。協会内部の人間がすべてを仕組んでいるというのなら、酒木原は一

体どうなったというのだろう。秀子を魔法少女の世界に引き込んだ彼を、敵視するようなことは秀子はしなかった。

「……ちよつと待ってください。堀田さんはなんでそれを知ってるんです？ それに、今戦争が行われているというのなら、一体狙われているのは誰なんです」

「訂正するのも面倒だからスルーするけど。私がそれを知ったのは今日。たまたま酒木原さんから手紙をもらって、全部知ったのよ。それと……狙われている魔法少女のことだけど、私には至極簡単に思いつくわ」

堀田が空になった空き缶を投げる。美しい放物線を描きながら、空き缶はゴミ箱に入り、からからと最後の叫びをあげた。

「金剛地に一番可愛がられてた、赤羽春子。スカウト部門本部長遠野が、恐らく今一番煙たがってる女よ」

第七話『バトル・フィールド』（前書き）

変化が可能性の誕生だと言うのなら、人はいくらかでも変化できるだろう。だが実際には、変化は可能性の鍵を握ったに過ぎず、ただのきっかけに他ならない。ここは地獄の一丁目。鍵を握った人間でも、残された時間は少ない。次回、『バトル・フィールド』。鍵穴は自分の中にある。

第七話『バトル・フィールド』

7

魔法少女の活動時間には、一時間の制限がある。戦争はその時間内でのみ行われる。赤羽は昨日、それを生き残ったのだという。酒木原とは未だに連絡はとれない。秀子は週末をここまで陰気に過ごすのは初めてだった。それが、他人にかける心配が原因だというのは、あまり人間に興味を持たない彼女にしてみれば、異常とも言うべき事態だった。

秀子の週末は、たとえば、一人でカフェを巡り、コーヒーを飲みながらさして興味もない文庫本を読むくらいである。だが、いつものように文庫本は秀子の頭に入っていかなかった。

「桜井先輩！」

突然大きな声で話しかけられる。オープンカフェの小さな柵の向こう側からお腹の大きな女性と、その夫と思われる男性が立っていた。

「桜井先輩、お久しぶりです！」

「あ、ああ、お久しぶり……」

誰だろう。先輩と言うからには、秀子の後輩という事になる。だが、彼女のことは思い出せない。得てして秀子にはこういうことが多い。もとより、他人にあまり興味がないのである。もしかしたら、忘れてしまったのかもしれない。

「本当に久しぶりですね。私、三年前に退職して以来ですよ！ 元気にしてましたか？」

「え、あ。そうね。元気よ。……貴女、子供が生まれるの？ そちらの方はご主人ってことかしら」

どうやら正解だったようで、夫は秀子に頭を下げた。背の高い、好感の持てる青年だった。彼女は、そんな夫を見てくすくす笑う。

「もう六ヶ月目です。もうすぐお母さんになるんだなあ、っていつも考えてるんですけど、なかなか実感沸かないんですよ」

「そう。ご主人も大変なんでしょうけど、元気なお子さんが生まれるといいわね」

眩しい姿だった。秀子の人生も、順調に推移することがあればこのような幸せが訪れたのだろうか。だが、彼女と自分には恐らく何かが決定的に違うのだ。この年齢まできて、今更何を願うと言うのだろうか。

「じゃあ、桜井先輩。子どもが生まれたら連絡させていただきませうね」

そう言つと、彼女の代わりに夫が頭を下げた。いい夫婦だ。仲も悪くない。彼女たちは、恐らく幸せな家庭を築くだろう。だが、自分はどうだ？ 自分はこのまま何もせずに終わるのだろうか。堀田の言葉がよみがえる。

『なにもしないのは、死んでるのとおんなじじゃない』

「あの」

「はい？」

「失礼だけど、その。なんていうか……お名前、なんだったかしら。すっかりど忘れしてしまつて、その」

彼女は屈託の無い笑顔をこちらに向けた。

「益本ですよ。益本ゆかり。先輩つたら、やっぱり名前覚えるの苦手なままなんですわね」

秀子はアパートに帰ると、殺風景な部屋に備え付けてあるベッドに体を投げ出した。昨日今日で、二件も増えた携帯電話のアドレス帳を検索し、堀田の名前を呼び出す。コール音六回目で堀田は電話に出た。心なしか、イライラしているようだった。

『うつさいわね。なんなの？』

「昨日の話ですが」

『昨日……戦争の話？ 言っとくけど、私はこれ以上関わるのはごめんよ。確かに、秘密は全部知ったわ。だからって奥まで突っ込むのはバカのやることよ』

確かにそうだろう。秀子も実際今日まではそう思っていた。なぜなら、秀子にはもうほとんど何かを成す可能性など残ってはいないならば、何もしないほうが良い。後ろ向きの考えであつたが、秀子にとっては現実的であつた。

「別に、貴女に最後まで何かしてもらおうなんて考えてませんよ。ただ、私が変身できるようにして欲しいんです」

『なんでそれを私に頼むのよ』

「協会に睨まれているという状況は同じなのに、貴女は何故か変身できますよね。誰かに頼るのを異常に嫌う貴女なら、変身も何かしたからこそ今でもできるんでしょう？」

『鋭いわね。ついでに、どこで戦争をしているかも知りたいってとこでしょ』

「鋭いですね。訂正も必要ないくらいその通りですよ」

そこには、確かな意思があつた。似たもの同士の女が考えることなど、どうしようもないくらい似通う。恐らく、堀田も似たようなことを考えているに違いない。

『あんだ、分かってんの？ 戦争に参加して、ターゲットに味方するなんて。すべてを失うわ。それこそ、命ですら。私は何も持っていないからいいけど、あんたはそうじゃない。その覚悟はあるの？』

「貴女が言ってくれたことでしょう。私は何もしいまま死ぬのはごめんです。だからと言って、本当に死ぬのも嫌です。でも、私の知っている人が死ぬのはもっと嫌なんですよ」

決意は固まつた。可能性など知ったことか。自分のことに身勝手になるのはもう遅すぎる。なら、他人の可能性のために自分をすり減らして何が悪い。

秀子は生まれて初めて自分を縛る枷を外した。それは自由そのもの

であり、果てしない暗闇を進むようなものだ。だが、その運命を選んだのはまさしく自分だ。後悔はない。

秀子は、ベッドのそばに忍ばせた魔銃トカレフを手取る。トリガーガードに指を入れ、引き金を引く。変身をしていなければ、魔銃トカレフは単なる玩具に過ぎない。だが、不思議と気持ちが高鳴る気がした。

泥にまみれた包帯を取り、新たな包帯を巻き直す。体を起こすのも辛い。ごつごつした木の床、そしてぼろ屋のシミだらけの天井。赤羽春子は、終わりになき戦いに絶望していた。いつもなら、魔法少女協会の専属病院で大抵の怪我は一晩で回復してしまう。それがないだけでこんなに辛いものなのか。

ふと、このまま倒れてしまえばと思う。そうすれば苦しむことはないのだ。そうすれば、普段の自分には戻れないにしても、この永遠にも思える苦しみから開放される。自分らしくもない考えた、と赤羽は頭を振る。

「……誰っスか」

魔法少女となって、赤羽は五年が過ぎていた。勉強と部活動の間をぬって魔物を退治していくうちに、赤羽はいつしか七人衆の一人「ブラステッド」と呼ばれるようになっていた。何度か修羅場をくぐると、人間の能力の中では特に反射神経と周囲の気配を読む力に長けてくる。それは、夜に戦わなくてはならない魔法少女に無くてはならない力だ。その卓越した気配を読む能力で、赤羽はそこに誰かがいることに気づいた。敵ではない事を祈りながら。

「誰でしょう……ふふふ」

分らないわけがなかった。同じ魔法少女。聞きあきた声。ゴスロリルック。江藤祥子がいつものように、闇夜に溶けてしまいそうな黒い格好でそこに立っていた。

「……自分を殺しに来たッスか、江藤さん」

不本意ながら、彼女の思考は赤羽にとって理解しやすい。なぜなら、江藤の全ては赤羽のために存在しうる（と、少なくとも江藤はそう考えている）。この場合、あの世で一緒になろうとするか、この世で添い遂げようとするかの二択だ。

「……私のこと、やっぱり嫌いな……？ 祥子姉さま、でしょ？」

「今話すべきはそういうことじゃないツスよ、江藤さん。あんたが味方か？ 敵か？ 今の自分にとってはそれが最優先ツス」

間合いは、二人にとってあまり意味の無いものだ。それだけ二人の持つ攻撃範囲は広い。ただ、速さとなればどうなるか分からない。それこそこの瞬間から、赤羽より早く江藤は攻撃を始めることができるだろう。だからこそ、江藤がどちらであるかを確認しておきたかった。当然の欲求だ。

「ね、春子ちゃん。私のこと祥子姉さまって呼んでくれる……？ そしたら私、あなたのためならなんでもするわ」

「言うかどうかは自分が決めるツス」

別段困ってもなさそうに首をかしげると、江藤はにやりと笑みを浮かべる。彼女なりのお茶目だったのだろう。相変わらず、状況を考えないマイペースぶりだったが、赤羽はそれに救われた気がした。「しかし、変身せずによくここまでこれたツスね。他の魔法少女とか、スタッフとかには会わなかったツスか？」

彼女たちがいる場所は、都市郊外にある魔法少女協会が管理する森林である。表向きは国立保護公園となっているが、夜には魔法少女の訓練、今は戦争が行われている。三日前からここはまさしく戦場になったのだ。当然、協会によって厳しい管理体制が敷かれており、入ることはもちろん出ることも非常に難しい。

「簡単じゃない。出会った人は全員くびり殺してきたの。ちょっと疲れちゃったけど、春ちゃんのためだもの。仕方ないわ」

冗談だと思いたかったが、この状況では信じざるを得ない。赤羽は古ぼけたランプに魔力を飛ばし、炎を炸裂させた。暗い小屋に明かりが灯り、暗闇から江藤の姿が浮かび上がる。いつも持っている

クマのぬいぐるみは、普段より血まみれだ。冗談ではないようだ。
た。

「なんて事を……。自分が何をしたのか分かって……」

「分かっているわ」

江藤の瞳はいつもより光っているような気がしていた。言い換えるならば、いつもより生きているようだった。江藤はクマを投げ出すと、赤羽を抱きしめた。いつものこと、といえばそれで一蹴できるが、こんな異常な状況では赤羽は困惑するしかなかった。

「なっ、ななっ……何をしてるツスか!？」

「私、すぐすぐく心配したのよ……?」

「はな、離れて欲しいツス……。じじ、自分はシャワーも浴びてないツス。臭いし汚いツスよ……」

「いや。私は春ちゃんのことならなんでも好き」

そういう殊勝な彼女からは、血煙の臭いがした。自分の為に、人間としての最低ラインすら放り捨ててきたというのか。それが、自分のため、ひいては赤羽のためだと信じて。彼女のしたことが真実であれば、許されるものではないだろう。だが、赤羽はそんな許されざる彼女を拒絶する気にはなれなかった。むしろその僅かな人の暖かさを振り払うことができなかったのだ。赤羽は彼女の肩を抱き返す。それは、彼女と同じ地獄に堕ちることを意味していた。

「本当に行くのね」

「無論です」

レンタカーのハンドルを握る堀田は、秀子に問う。

「私は何度も止めたわ」

「言うまでもない事です」

風が痛いほど吹いている。高い崖の眼下には、深く暗い森林が広がっている。戦場が、死の森がそこに広がっている。

「なんだか、今のアンタは結構好きよ」

「そうですか」

「じゃあ、いってらっしゃい」
変身。

そう呟くと、秀子の体は光に包まれ、およそ二秒で変身は完了する。オレンジ色のスカート。レース。手には魔銃トカレフ。魔法係長桜井秀子が崖の上に立つ。砕いたダイヤモンドをありったけの力でばらまいたような、雄大で広いこの星空の下では、今日も一時間限定の愚かな戦いが始まろうとしている。無論、自分のこの戦いが愚かでないなどという保証など何も無い。だが、秀子はこれから起こるであろうすべてに後悔をしたくないと願った。なら、やるしかない。

「いつてきます」

何もしないまま、人生を終えるなどごめんだ。

秀子は宙に身を投げ出し、戦場へ落ちていった。

第八話『鬼謀』（前書き）

暗い闇が支配する森で出会った女たち。ある者は愛を守るため、あるものは生き残るため、ある者は大きな決意を果たすため。様々な思惑がコーヒーマシンのミルクのように混ざり合う。果たして、そのコーヒーマシンを飲み干すのは誰か。そして、その味はいかなるものなのか。それはまだ、誰にも分からない。次回、『鬼謀』。秀子もまた、融けあう一つの意思にしか過ぎないのか。

第八話『鬼謀』

8

魔法少女協会スカウト部門本部長である遠野は、暑い季節にも関わらず、そのひよろりと高い痩せ気味の体を、ダークグレイのスーツに身を包みつつ、戦場に数えきれないほど設置されたライブカメラからの映像を見ていた。魔法少女協会本部ビルの一室は、まるでモニターで構成されたかのような様相を呈していた。

「魔法係長」ですか。言い得て妙ですね？ 酒木原さん」

酒木原はその巨体をソファーに沈めながら遠野を睨みつけた。その顔先には、協会員によつて銃が付きつけられていた。動くことは難しそうだった、

「だが、『イレギュラー』の堀田は協力しないようです。貴方の希望は早くも潰えたわけですね」

「遠野君。私はそうは思いませんよ」

薄い笑みを貼りつけた遠野の顔が、少し歪んだ。

「桜井さんは、強い人です。ここまで来たのですから、彼女なりの決意を持つて来たということでしょう。自分一人で何かを為そうとするのでしよう。遠野くん、覚えておいたほうがいい。君が思う以上にあの人は簡単ではない」

「全く、どいつもこいつもなぜ私の思うとおりに動いてくれないのか分かりませんよ。この国のために思うなら、黙っておいてくれればいいというのに」

遠野はパイプ椅子に腰掛け、ライブカメラ用のコンソールをいじる。せわしなくモニターの映像は変わる。秀子の顔、赤羽の顔、江藤の顔、緋色の顔、顔、顔……。遠野はとても落ち着いているとは言いがたい状態らしかった。

「遠野君、君は間違っている。確かに、今この国は魔法少女協会に

巨額の年棒を支払い続ける余裕などないでしょう。だからと言って、気に入らない魔法少女を間引くことなどあつてはならないのです」「分かっていないのはそつちじゃないですかねえ。私はそのような目的でこの戦争を始めたわけではありません。もっと建設的な提案をしているのです」

コンソールのスイッチを切り替えると、壁一面のモニターが一斉に同じ文字を表示した。『神罰計画』。それが表示された文字だった。

「神罰計画……？」

「そのとおり。我々魔法少女協会は、人工的に魔法少女という名の戦士たちを産み出してきた。だが、魔法少女はあくまで独立した戦士であり、あくまで個々人が社会というシステム上発生するバグである魔物を狩りとっているだけに過ぎません。なら、それらを統率する人物がいていいはず」

「それが『七人衆』であつたと私は考えていましたが」

「彼女たちはあまりに身勝手が過ぎました。統率者が優秀でなければ、人間である以上、絶対に兵器とは成り得ない。ならば、たった一人でも兵器となりうる魔法少女がいるとすれば、他の魔法少女など必要ないではありませんか」

この男は、魔法少女でなく兵士が欲しいのか。それで満足せず、兵器まで欲しいという。過ぎた考えた。酒木原は遠野に憤慨した。彼のどす黒く浅はかな考えに呆れ返った。そんなことが、誰かの命を奪うこととイコールになつてはいけない。

「もちろん、こんなやり方は本意ではありませんが、これも国のため。我が国は戦車やミサイル、戦闘機がめつたに持てない不思議な国です。自国を守るための手段がないのです。なら、それに代わるものを持つて何が悪いのですか？ 低コストで大きな効果が生まれるこのやり方なら、誰も損をしないではないですか」

「私たちがそのような身勝手を止めないでどうするんですか？ 君はもう少し思慮深い人間だと考えていましたが、私の認識違いだっ

たようですね」

黒服が遠野の意思を汲んだように、手に持った銃を構え直した。撃ちはしないことはよく分かっている。だが、それは酒木原に対して十分な脅しになり得た。丸腰の人間が銃を持った大人二人に敵うと考えるほど、酒木原は愚かではなかった。

「勝手なのはあんたでしょう、酒木原さん。あんたも言ったように、もう協会はボロボロだ。資金も足りない。今みたいに手厚い資金援助が受けられてるのはスタッフ部門が国に対して身を削ってるからっていうのは分かるでしょう？ スカウト部門がスカウトした魔法少女を、無駄遣いしたくないことくらい、あんたにも分かるはずだ！」

「それがエゴなんですよ、遠野君。君が魔法少女をただの物としか見ていないことがよく分かります。結局は自分の利益を考えているのではないんですか」

「黙っている、あんたは現場の叩き上げだろうが！ 偉そうに……キヤリアの僕に指図するんじゃない！」

愚かな考えだ。彼の回りの人間がどれだけ賛同しているかは、酒木原にも知る由はない。スカウト部門の人間は、あくまで個々人で動く。酒木原すらこうして拘束されているというのなら、それだけ根回しが終わっていないということになる。まだ賛同者は少ないと考えていいだろう。……あくまで、酒木原の部下にはという前提ではあるが。

「遠野君。考え直すなら今のうちです。こんなことは長く続かない。君は、魔法少女を……いや、人間を舐めすぎている」

「黙れ！ あんたなら、僕の計画を理解してくれると思ったのに……失望しましたよ。顔も見たくない。……連れていけ！」

もう何時なのか分からない。暗いことだけは分かる。赤羽はボロ

小屋で息を潜めながら外を伺っていた。ちらほらと小屋の周りに魔力の反応がある。恐らく今日も査定をあげるために腕利きの魔法少女達がやってきたのだろう。もう三日目になる。感情が希薄になると、魔力は薄くなる。つまり、発生するエネルギーも少なくなってしまう。魔法少女にとって、ストレスは魔力が淀む大きな原因になる。今の赤羽には、この二つの事柄が同時に襲いかかっている状態だった。だが、今日は江藤がいる。普段なら煙たがっている彼女も今日は頼もしい。温かい。人は、一人では生きられないのだ。どんなに一人でいようとしても、一人では行き詰まってしまう。だが、もう一人いるだけでこんなに温かいのだ。もう一人いるだけで、こんなにも嬉しい。赤羽は心の底からそう思ったが、口には出さなかった。

「春ちゃん、大丈夫？」

「問題ないツス。……はつきり言っておくツスが、今自分は他人のお守りをするほど余裕はないんす。だから、自分の身は自分で守ってほしいツス」

「愚問ね……。私は、春ちゃんのために全力を尽くすわ……。自分は二の次のつもりよ」

「上出来ツス。……それじゃ、行くツスよ」

江藤を下がらせ、赤羽はドアノブに触れた。魔力の反応が近づく。なんとか引きつけて、少しでも多く仕留めなければならぬ。心臓が波打つ。静かに『変身』と呟く。黄色いドレスに身を包み、フライトジャケットを羽織った『プラステッド』赤羽春子が姿を現す。それを合図に、江藤も変身を済ませた。漆黒のドレスの中に、白いリボンで装飾された、正直なところ普段とあまり変化のないものだった。

「今ツス！」

赤羽が叫ぶ。ドアノブに向かって指を鳴らす。すると、一瞬ドア全体が大きく膨張し、そのまま爆発を起こした。魔力の反応が二つほど消える。手加減できなかった。もしかしたら死んでしまったか

もしれない。だが、今は生きなくてはならない。同僚にやられて死ぬなんて、理不尽な死に方だけはゴメンだった。そう、金剛地と同じ死に方だけは。

「春ちゃん……！」

蚊の鳴くような小さな叫びが聞こえたような気がした。江藤だ。

光線が四方八方から飛んでくる。だが、気づいたときに避けるすべはほぼ残っていないかった。赤羽を狙った幾条もの光線は、全て彼女を逸れていった。避けるすべは残っていない。だが、防ぐ術を江藤は持っていた。魔法少女が光線として打ち出しているのは、魔力を膨大な熱エネルギーに変換したものである。江藤はその熱を自在に操ることができる。『ブラック・イフリート』の異名を取る彼女にとってすれば、魔法少女の光線をそらすことなど朝飯前なのである。「さすが！」

赤羽はフライトジャケットの胸ポケットを開き、単四電池を取り出す。電池はその構造上、エネルギーに変換した魔力をチャージしやすい。指の先から一気に魔力をチャージすると、周囲にありったけの力で放り投げる。指を鳴らす。すると、電池が次々と炸裂し、爆発を起こした。赤羽は魔力をチャージしたものを爆発させることができるのである。

「春ちゃん、一回撤退しましょう……。囲まれているわ。このままでは危険よ」

江藤は意外にも現実的な提案をしてきたので、赤羽はそれに乗ることにした。魔力の反応はまだ増えてきている。数名ほど、強大な反応もある。一箇所に留まるのは危険だ。夜はまだまだ長い。

酒木原は黒服によって、いつも自分が詰めている事務室に連れて

こられた。どうも様子がおかしかった。酒木原の質問に答えようとしない、それは分かる。だが、小突いても何もしてこないばかりか、力だけ強くまるで『そうすることを忘れてしまったかのような』雰囲気だった。

「……一体どうしたというのです？」

何も答えない。酒木原は巨体をゆすり、勢いをつけて黒服をはじき飛ばす。たったこれだけのことだが、酒木原の一番の武器ともなるのだ。

「反撃してこない……」

転がってどこかをぶつけたのなら、少しはそこをさするような動きを見せてもいいはずだった。黒服たちはそれこそ転がったままで起き上がろうともしない。ただただ、這いつくばったまま同じく転がった銃を拾おうとしている姿がただただ奇妙だった。

酒木原たちスカウト・スタッフの多くは、魔力を行使することはできない。ただ、酒木原は元魔法使いであり、資格を失った現在でも魔力の感知を行える。

秀子たちのように魔力を行使して戦うことはできないが、魔物の位置の特定や魔法少女達が魔力を使ったことが分かったりするのである。

「もしや」

虫のようにうごめいている黒服に、酒木原は僅かな魔力の反応を感じたのである。もちろん、魔法少女協会のスタッフといえども、魔力で人を操るようなことはとうてい不可能である。よって、この黒服を操っているのは、遠野ではない。

「……これは、きな臭くなって来ましたね」

酒木原は素早く各所へ連絡を取り始める。こうしている間にも、魔法少女達は危機に陥り続けているかもしれないのだ。ただひたすらに、酒木原はそれが心配でならなかった。それは、スカウト部門チーフとしての責任感でもあり、魔法少女達に対する愛、親子の情に近い感じ方でもあった。

星が瞬き、空が遠くなる。風を切り裂きながら、秀子の体は弾丸のように夜の森へ向かっていった。ただ、このままでは地面に激突してしまいかねない。ブーツの裏から宝玉を通し推進力を調整し、森に降り立つ。森の中は暗く、淀んだ空気が漂っている。腐葉土から香る匂いと、魔力が渦巻いているためか肌がざわつく感覚が、なんとも言えない不快感を催す。この広い森から、赤羽を見つけ出さなければならぬ。

「こんばんわ。君も参加者か？」

凜とした通る声が響いた。陰鬱としたこの森には、随分と似つかわしくないように思え、もしかしたらいきなり幻聴でも聞いているのではないかという感覚に陥るが、どうやら秀子の感覚はまだ狂ってはいないようだった。

秀子が振り向くと、そこには背の高い切れ長の目をした女が立っていた。魔法少女のコスチュームである青いドレスの上からでも分かる体つきは非常に女性っぽいのに、月明かりに照らされた顔つきは中性的で涼やかな印象をあたえる美女だった。

「そういう貴女もそのようですね」

女は腕組みをすると、腰に下げた刀に触れた。

「ああ。……自己紹介が遅れてしまったな。私の名前は緋色だ」

暗い森では、相手の表情は伺いづらかった。ただでさえ彼女は切れ長の目をしていて表情がわかりづらいのだ。秀子の対人コミュニケーション能力の低さでは、なおさらそれはわかりづらいようにも思えた。

「私の名前は……」

秀子が自分の名前を名乗ろうとしたとき、女の目がかつと見開か

れた。鯉口を切り、下段から上段に向け抜刀。恐ろしい勢いで周囲の木が舞い上がり、腐葉土は混ぜ返される。秀子はそれをほぼ勘で危険であると察知し、バックステップで飛び退いた。スカートのフリルが刀に触れていないはずなのに、ズタズタになっている。

トカレフを構え、トリガーを引くが、文字通り疾風のようなスピードで接近、柄でトカレフの射線をずらす。ただごとではないスピードだった。

「並の魔法少女ではないな……。これなら堀田がやられるのも得心がいくというものだ」

「お褒めに預かり光栄ですね。……貴女は恐らく、七人衆の一人ですネ？」

「ご明察。君が桜井秀子だな。私の斬撃を受けきるとは大したものだな」

まるで釣り糸を渾身の力で引つ張り合っているような、張り詰め切った緊迫感がその場を支配した。お互いがお互い同士を実力者と認め合っている以上、迂闊に動き出すことは死を意味する。頭の中で辞書を引いたように、秀子はこの状況を冷静に分析していた。同時に、自分にこんな冷静な側面があるものなのだろうか、と若干自分に恐怖を覚える。戦い続けていることが、自分にこんな変化を及ぼすなんて、考えもつかなかったことだった。

「……私を見逃してはくれないようですね」

「当然だ」

「どうしてもやるというのですね」

「当然だ。さあ、君もどうするのか言え。君がこの私と戦うのなら『戦う、そして貴女に勝つ』と返すのがルールだ。……他の連中は君から手を引いたようだが、協会に仇なすと言うのなら容赦はしない」

秀子は魔銃トカレフを緋色の眉間に寸分違わず向けた。そんな秀子が気に入らないのか、緋色は柄に手を置き戦闘態勢を崩さなかった。

「無駄だ、桜井秀子。君は戦い方をよく知らないようだな。はつきり言つて、『ウィール・ウィンド』の異名を取る私が、君を細切れにすることはたやすい。諦めて降伏すれば命までは取らないぞ」
「ご高説ありがとうございます。ですが、今は魔法少女同士で争っている場合ではないのです」

緋色は中段に刀を構える。その構えからは優雅さすら感じられたが、突き刺すような殺気は消えないままだった。

「……死んだ金剛地もそう言っていた。だが、私は私の正義を貫く私のエゴを貫く。……君を倒す！」

宣言が終わるか終わらないうちに、緋色の刀は振るわれた。秀子もトリガーを引く。だが、二メートルも離れていないはずの緋色には全く当たらない。逆にこちらのコスチュームが裂け、血が滲んだ。魔力でコーティングしてあるというこのコスチュームでなければ、おそらく文字通り秀子の体はまつぶたつになるだろう。

「私を殺す気ですね」

「そうだ！ 私は自分の正義の為に君を殺さざるをえない。協会に立てつくのなら君は悪だ！」

振り下ろされた刀を魔銃トカレフで防ぐ。基本的に、魔力でコーティングされたアイテムは通常の物体の何倍もの硬度を持つようになる。だが、緋色の嵐のような攻撃を防ぎ続ければ持たなくなるだろう。秀子は早速切り札を切ることにした。自分は、大きな決意を持ってこの森に降りてきた。ならば、こんなところでやられてはいられない。スカートの裏に仕込んだモノを取り出し、構える。右手には魔銃トカレフ。左手にはグロググ17。かつて敵対し、友として酒を飲み、死んだ、金剛地と同じ型。

「バカにしているのか、桜井秀子！」

「いえ、私は勝つ気でいます」

腕をクロスさせ、魔法銃術基本の型である『X』の構えを取ると、秀子にはやりと不敵な笑みを浮かべた。上段から迫る刀を、交差させた銃で受け、グロググで払いトカレフで撃つ。足に命中し、緋色

は態勢を崩した。グロッグは正確に緋色の眉間を捉え、勝負は決した。

「……なぜ撃たない。この態勢からなら、いくら魔法少女とはいえ確実に死に至るぞ」

「私は元より戦う気はありません。…先程は成り行きで戦いましたがね。もう私に剣を向けないで頂けますか？」

「……甘っちょろいぞ、桜井秀子。私がそんな約束を反故にして、君を真つ二つにしようとしたらどうする気だ」

秀子はスカートの内側にあるベルトにグロッグとトカレフをしまつと、下がってきていたメガネのフレームをくいつと上げた。

「考えるまでもない質問ですね。それが貴女の正義とは、先程の発言からは到底考えられませんから」

刀を杖がわりに態勢を直すと、コスチュームの埃を払い、そのまま緋色は納刀した。彼女も納得したようだった。

「君は不思議な女だな。協会に仇なす魔法少女と言うから私も本気をだしたつもりだったが……。君は一体なんなんだ？ 何が目的なんだ」

秀子は空を見上げる。月と星の僅かな光のみが、この森を照らしている。

「私は、この戦争を終わらせに来ました」

第九話『多情仏心』（前書き）

無茶、無謀、無策、そして天より高い自尊心と海より深い傲慢。彼女を構成するとすれば、恐らくこうだろう。誰かが言う。『それに無責任も加えてくれ』だが私はそれを拒否する。彼女ほど約束を、期待を、友情を裏切らないものはない。次回、『多情仏心』。加えるとするならば、『無理』かもしれない。

第九話『多情仏心』

9

「……それは、真実なのか」

秀子から緋色が知り得たものは、彼女に絶望の表情を貼り付けるのに十分なものだった。緋色にとって、協会は正義であり、自分の支えであつたのだ。自分が拠り所にしていた柱を外されるという裏切り。信用の崩壊そのものだ。

「とにかく、協力してください。私はあの人を死なせたくないんです」

あのまつすぐな瞳をした赤羽の顔が、秀子の脳内に現れる。秀子の行動はエゴかもしれない。だが、彼女を救わなければならない。

それだけが、秀子が彼女のまつすぐな瞳に報いる唯一の方法だった。「待て。私は『君の言うことが真実なのかどうか』をまず確かめたい。はつきり言うが、君のことを信用しているわけではないからな」

「証明ですか。……それなら、赤羽さんがしてくれるはずです」

「君がさつき、赤羽は魔物として狙われていて、私の目には魔物にしか見えないと言ったばかりじゃないか」

そこが最大の問題であつた。いくら協会のスカウト部門が暴走を起こしていて、幻覚装置によって特定の魔法少女が魔物に見えるといつても、秀子以外の人間にそれを分からせるのは至難の業だ。

「それに、もう一つ疑問がある」

「为什么呢？」

「君はさつき、魔法銃術を使つたな。あれは、銃撃特化タイプの魔法少女の中でも、ほんの一部の魔法少女にしか体得できない技術だ。真似をしたとしても、一朝一夕で身につくものではない。我々は魔力を『管』を通して供給しているが、両手で同時に正確精密に魔力の放出を操る事自体、センスでは片付けられないほど経験を要する

ものだ」

なるほど。確かに不思議だった。いざと言う時のために買ったエアガンがこんな形で役に立つとは思っていなかったし、秀子自身もうまくいくとも思っていなかった。ただ、熱湯に触れたら手を飛びのけてしまうように、反射に近いような感覚だった。それまで、一回もやっていないのにもかかわらずだ。

「それについてはわかりません。これを使った金剛地さんとは一度だけ戦いましたが、2丁拳銃を使うということしか知りませんでした」

「そうか……。もしかすると君は……」

何かを言い含めた緋色は、突然顔を飛び上げ、誰もいないはずの森をキツと睨みつけた。どうやら、魔力の反応があったようだった。秀子もようやく魔力の反応を感じ取った。知つての通り、魔力は強力な魔物クラスでもない、並の魔法少女が感知することは難しい。魔法少女同士でもそれは同じであるが、対人戦で魔力を放出することとは殺気をばらまきながら歩いているのと同義である。歴戦の魔法少女ともなると、その僅かな魔力すら空気の中から感知することが可能となる。

「……なんだ、この魔力は。混ぜ物でもしているようだ……。出てこい！ 私の攻撃範囲はゆうに十メートルは超える。隠れるだけ無駄だ」

そこにいたのは、小柄な少女だった。秀子は百六十後半、緋色にいたつては百七十を超えているが、緋色の腰程しかない。だが、魔力の感知では緋色に劣るはずの秀子ですら、この少女に対して禍々しい何かを感じていた。

「……君は、原野奈々だな。一体どうしたんだ、こんな所に」

「どうしたのか、とは随分な物言いですね。簡単なことです。緋色さん、あなたを連れ戻しに来たのですよ」

小柄な少女は、暗い闇でも分かるくらい美しい金髪をツインテールにまとめており、ダークグレイのドレスに身を包んでいた。手に

は革製グローブが嵌められており、手の甲には何かの紋章付きの部品がうめこまれている。更に特筆すべきは、指関節の一つ一つにリングが埋まっていることだろう。

「どういう意味だ」

「簡単なことです。魔法係長は嘘を付いている。あなたを仲間に取り込み、悪事の手助け……そう、協会への復讐でも企んでいるのでしよう」

日本人離れた黄金の目を持つ原野は、そう言つと秀子を見下したような目で睨めつけた。自分より遙かに年下の少女にそのような事を言われて、思わず否定したくなってしまう。同時に、大人げないな、という卑下した気持ちも生まれてしまうのだった。

「くだらんことだな。……桜井秀子、一つ聞きたいことがある。君は、金剛地と握手をしたことはあるか？」

あの日がフラッシュバックする。金剛地の手は暖かった。彼女は肩で風を切るように歩いていった。結果的に、それが彼女の最後の姿になったが。

「……あります。それが何か？」

「……そうか。原野、聞いての通りだ。私は桜井秀子を信じる」

余裕すら感じられる原野の表情に、憎悪が差し込んだ。

「何ですって？」

「私はお前の味方にはならない。協会が正義ではないと言うのなら、私は自分を信じる。自分の信じるエゴを何処までも信じる事こそ、私の考える正義だ。……組織に裏切られたのだ。これくらいは当然だろう？　なあ、七人衆のナンバー2よ」

そつといい放つと、緋色は鯉口を切り、刀をふるう。刀を振るうたびに、緋色の回りの空気が集まり、放出され、鎌鼬のように原野を襲った。先程秀子が受けたものより、数段は威力が上がっている。その証拠に、森の土が噴き上がり、木々はスタスタに引き裂かれ倒れた。土煙は上がったままだ。

「……いい、一体どうなったんですか」

「油断するな！……これで起きてこなければ走って逃げるところだが、どうもそうもいかないようだな」

魔力の反応は弱まりもしない。原野はまだ気絶すらしていないのだろう。風切音が周囲を包む。秀子は緋色を見るが、脂汗を浮かべているだけだ。刀は比較的どこからでも対応ができる上段に構えて、周囲の様子を伺っている。彼女は何もしていない。

「……桜井秀子、動くな。私たちは囲まれている」

「魔力の反応は一つしかありませんが」

「ああ。だが囲まれている。動けば……首を飛ばすだろうな。あいつは私より遥かに協会への忠誠心が高い」

月の光が、空間にキラリと反射する。反射するものなど何も無いはずだ。そこに何かがある。秀子が目を凝らすと、細い糸のようなものが空中に浮かんでいる。よく見れば、それが空間を覆うように無数に張り巡らされているのである。

「鋼線だ。それも、触れれば切れるレベルのえげつないものだな。」

恐らく、原野がちよっと動かせば……」

「どうなるかなんて簡単なことでしょ。あなたたちの体はポテトサラダの卵のように細切れになります」

土煙が晴れ、ようやく原野の姿が現れた。よくよく見れば、原野の手の甲から鋼線は伸びているように見えた。それが各関節のリングを通して伸びているのだ。指を少し動かせば、恐らく原野の言うとおりになるのだろう。

「私たちを殺すか？ 原野」

原野は答えない。彼女の沈黙は恐らく肯定と同じなのだろう。

「ここまで……か。しかし、私はただでは死なん。せめて貴様に――太刀浴びせてやるぞ」

緋色の刀を握る力が増したのが分かる。恐らく、斬撃でこの鋼線をなんとかするつもりなのだろう。秀子の銃撃より突破の可能性はある。だが、当たれば致命傷は免れない鋼線を、全て避けきることができようはずもない。

「……緋色さん」

「すまない。私の判断ミスだったようだ……。協会が敵だという以上、魔力反応が出た時点で戦闘は避けるべきだったんだ」

「……いいえ、緋色さんは間違ってるんじゃない。ここで貴女と出会い、ここで敵に足止めを食らっている。これがいいんですよ」

秀子はニヤリと不敵な笑みを浮かべた。そして、天空に向かってトカレフを掲げ、トリガーを引いた。銀河に新たな星が加わるわけではない。ただ、その一発は、信号替わりなのだ。万が一のための緊急手段。

「何をしている！」

原野が右手を少し上げる。秀子に一瞬で鋼線が巻き付き、体を締め上げる。恐らく切れるギリギリのところか、常人ならとくに輪切りになっているのかどちらかなのか、秀子には分からなかった。だが、全身を焼けるような痛みが襲い、思わず歯を食いしばってしまっている。

「……仲間でも呼んだつもりですか？ 考えれば簡単なことでしょう。無駄というものです。恐らく、赤羽は満身創痍。距離も遠い。とても私たちのいる場所にたどり着けるとも思えません。せつかくの信号弾もどきも、死ぬのが早まっただけです」

「さあ、それはどうでしょうか。私が考える仲間は、もう一人残っています」

その声に答えるように、森に雷が落ちたような轟音が響いた。もちろん、雨は降っていない。星空は変わらず瞬き、月も綺麗なものだ。では、さっきの音は何だというのだ？

「カリバアアン！」

原野と秀子たちの間に、巨大な剣が振り下ろされ、ぶちんと鋼線が切れた。

「今です！ 私たちは逃げましょう！」

「まさか、切り札を残していたとは……。桜井秀子、君はなかなか食えないな！ だが、大丈夫なのか？」

「話は後です！ 今は逃げます！」

振り向かずに、全力で秀子と緋色は森を翔けた。もはや、躊躇している場合ではない。助っ人の勝利を祈りながらも、赤羽が無事かどうかが気になって仕方が無いのである。

「……それに、私は彼女が負けるなんて考えていませんよ」

原野はその巨大な剣に鋼線を巻きつかせると、容赦なく輪切りにしてしまった。向けば、本体は巨大な泥の騎士のようだった。こんなものを操るのは、この国ではただ一人しかいないだろう。

「『円卓の騎士』『召喚士』『フリーダム』『イレギュラー』……あなたを形容する二つ名は簡単ではない……。そのあなたがなぜ私の邪魔をするの」

原野と対照的な、くすんだ金髪。ド派手なピンク色のドレス。子供じみたステッキ。そしてその自信たっぷりの不敵な笑みが、彼女を彼女たらしめていた。

「堀田三津子！ イレギュラー如きがこの私に……ナンバー2の私に敵うと思っているのか！」

「ミッチーよ」

「は？」

「魔法少女ミッチーよ。今度その名前を言ったら、コンビニおにぎりのビニールみたいにあんたのツインテールを横に引っ張って裂き殺してやるわ」

泥人形こと、ロードナイトは森の腐葉土に手を突っ込むと、輪切りにされたカリバーンをあつという間に復元してしまった。媒介が土のため、土さえあれば魔力が続く限りはすぐに戻るのである。

「それに、あんたみたいな一桁台のお子ちゃまにバカにされるのは……全然自由じゃないわ。つつーわけで、あつという間に大人の階段登らせたげるわよ。そのまま天国の階段登っちゃうかもしれない

けどね！」

堀田の目は、どこまでも自分勝手に自信満々であった。

二人は森を翔けた。堀田は命を賭けて来てくれた。秀子にはそれがたまらなく嬉しかった。自分の身勝手に付き合ってくれる彼女を愛おしく感じた。なんとしても、赤羽を救わなくてはならなかった。「……ここまでくれば問題ないな」

足の裏の宝玉で加速してきたため、回りの状況はよく分からない。秀子にはぼやとした魔力が感じられるのみで、細かな探知はできないようだった。

「緋色さん、赤羽さんは？」

「……わからん。私も『これくらいの魔力を持った誰かがいる』くらいであれば正確に感知できるが、それが誰かまでは判別できないからな……」

土と木の香りと湿気た空気が、秀子の鼻を刺激する。耳には、得体のしれない虫の鳴き声がするのみで、人は感じられなかった。

「……近いな。四人……いや三人か？　かなり疲弊しているようだ」草がこすれる音が鳴る。反射的に秀子はグロツグを抜き、トカレフと同時に銃口を向ける。泥だらけになったコスチュームに身を包んだ二人の少女が倒れこんだ。

「江藤！　まさか……しかもこいつは……魔物！？　なぜ江藤が魔物を守っている！？」

「落ち着いてください」

秀子は狼狽する緋色の肩を掴む。

「落ち着いていられるか！　恐らく、こいつが元凶なのだ、こいつが」

緋色の眼は淀み、震える手を柄に置く。掴んだ肩を離せば、二秒
かからずに赤羽はまっぴたつになることだろう。江藤と呼ばれた少
女は赤羽以上に疲弊しているようだ。

「いいですか、緋色さん。貴女、魔力のコントロールはできますか
？」

「当たり前だ」

「では、眼から自分の魔力を追い出してください。焦点をずらすよ
うにするとやりやすいはずですよ」

緋色は視線をぐりぐりと動かす。力強く柄を握ろうとしていたはずの手からは徐々に力が抜ける。幻視装置の解除方法は意外にあっけないものだった。この装置は自分の魔力をエネルギーにしており、特定の人物を見るとスイッチが入る。つまり、眼に到達している魔力の供給管を切ってしまう方がいいのである。

「ん、おお。赤羽……バカな、魔物だったはずなのに……」

「私の話は信じて頂けましたか？」

「……疑って悪かった。君を信じると言っただけなのに」

赤羽は包帯だらけで血も滲んでいる。彼女を守りながらなんとかここまでできたのだろう江藤も、それは同じだった。ここまで動けたのが不思議なくらいの怪我だ。

「桜井秀子、君は医療魔法は使えるか？」

「そんなのあるんですか？」

「ある。だが私は使えない。七人衆は攻撃に特化した特殊能力を持つが、治療能力を持つ者はいないからな。医療特化型の魔法少女が都合よく私たちに手を貸してくれるとも思えん」

秀子はコスチュームの腰についたポケットをまさぐると、新しい包帯と消毒液を取り出す。元来用意周到な所がある秀子は、今回の戦いに赴くにあたって、最低限の準備はしてきた。大学でラクロス部に所属していたときは、生傷が耐えなかったのである。ラクロスはお嬢様のスポーツとしてイメージが先行しているが、実際はラグビー並の小競り合いが頻発することもある激しいスポーツだ。男子

の場合それが顕著であるが、女子ラクロスも男子ほどでは無いにして、怪我の頻度は高い。応急処置はお手の物である。

「とりあえず、傷の治療だけしましょう。魔法に頼らずともこれくらいは問題ないはずですよ」

泥だらけとなった赤羽の包帯を外し、消毒液をかけた後手際良く新たな包帯を巻き直す。しないよりはマシ程度ではある。

「ところで、そっちの……江藤さん、でしたか？　彼女は大丈夫なんでしょうか」

「この様子だと、赤羽の味方をしてここまで来たようだな。息はあるようだ」

四力所目の包帯を外し、消毒液をかけた時、赤羽は跳ね上がるように起きた。どうやら消毒液がしみたようだ。

「じ、自分は……」

「赤羽、気がついたか」

緋色は胸をなで下ろした。秀子もそれは同じだった。ここで死なれては今までの戦いが無駄になってしまう。ガサガサと草木を擦りながら、赤羽は体を起こした。

「……桜井さん、それに緋色さんまで……。自分を助けに来てくれたツスか？　いや……その前に、自分の姿が魔物に見えるはずじゃ

……」

「桜井秀子のお陰だ。まさか協会に騙されていたとは思えもしなかった。君の姿が魔物に見えるからくりも解いた。……この森から出るぞ」

江藤は赤羽が覚醒したのと同時に目を覚ました。まるで見計らっていたかのようなタイミングだった。

「……せっかく二人きりだったのに、邪魔しないでよ……」

心底残念そうな顔をする江藤だったが、赤羽が起きているのを見て表情を変え、脇目もふらずに抱きついた。態度はともかくとして、必死にここまで赤羽を運んできたのは彼女に違いないのだ。それだけ嬉しいということなのだろう。

「痛い！ 痛いッス！」

「江藤さん……と言いましたか？ 貴女は怪我は大丈夫なんですか」
「誰だか知らないけど、私は大丈夫……。傷口は焼いたから消毒も済んでる」

痛がる赤羽に抱きつきながら、江藤は血まみれの包帯を外すと、それをほうり投げた。なるほど、確かにひどい火傷になっているようだ。これを自らやったというのだから、常軌を逸している。秀子はその光景に思わず目を背けてしまった。月明かりしか無いこの森でよかった。

「江藤、すまない。私が気づいてさえいれば……」

「私は春ちゃんと一緒なら何だっていいわ……。むしろ、なんで助けになんかきたのか分からないくらいよ……」

死にかけていたのがまるで嘘のように、江藤は愚痴を垂れ流し始めた。そんな彼女をみやりながら、いつものことだ、気にするなと緋色は秀子に耳打ちした。赤羽のこととなると、江藤は見境がなくなってしまうらしい。

「とにかく、ここでグズグズしている時間は無いぞ。ここから早く出るのが先決だ。原野がいつ追いついてくるかも分からない」

「原野……やはり奴は協会側の人間だったんスね」

先ほど、鋼線が巻き付いた跡が秀子の体に赤く残っていた。それはほとんど恐怖と同じようなものとして、秀子の心身共に刻まれている。

「そうだ。恐らく、花井も来ているだろうな……。江藤、どうだ？」

「さあ……私は興味ないから」

素っ気無い態度で、江藤はくると赤羽の包帯を巻き直し始めた。どうも秀子の巻き方が気に食わなかったらしい。赤羽はそれ自体を嫌がると同時に、傷に張り付いた包帯をはがされる地獄を味わっていた。江藤がそんなことを気にするとも思えなかった。同じように、自分の回りの魔力の変化にも興味はないらしい。

「……赤羽、桜井秀子。どうだ？ 何か感じるか」

「プレッシャーのような、でっかい魔力を感じるッス。それに比べて、通常サイズの魔力が……もう近くまで来てるッスね」

それを察していたのか、緋色は刀を構える。秀子も慌ててトカレフとグロッグに手をかける。江藤はともかくとして、赤羽は消耗しきっている。何人いるかは知らないが、戦わせるわけにはいかなかった。

「……通常であれば、魔法少女同士が戦うことは訓練くらいしか機会は無い。これだけの人数と戦うのは私は初めてだ……。油断するなよ、桜井秀子」

「無論です」

一瞬だけ、水を打ったかのような静寂が訪れたかと思うと、草木の陰から女が飛び出してくる。一人ではない。五人、十人……いや、二十人はいる。

「ば、バカな……全員年棒一億超の魔法少女じゃないか！？ もうやめるんだ、我々が戦う必要はない！」

緋色の叫びにも、彼女たちは答えない。全員、各々が得意としているのである。武器を持ち、今にもこちらにとびかからんとしているのが分かる。それが、緋色の言葉でさえ動かない強固な意思を持つてされようとしているのが、秀子には分かった。

「……緋色さん、何を言っても無駄なようです。ここは私に任せてもらえませんか」

「なんだと？ ……いや、分かった。私は赤羽と江藤を守る。君に任せようじゃないか、桜井秀子」

緋色はおとなしく引き下がると、刀を抜き空を裂いた。すると。周囲の空気が収束し、厚い壁となった。これが彼女の能力の一部なのだろう。

『愚かな……たったひとりで戦うと言っんですの？』

高い声が響く。この場にいる人間の誰でもない声。

「花井か……やはりお前の仕業か！」

緋色にはこの魔法少女たちをけしかけた者の正体が分かっている

ようだった。その誰かに向かって、緋色は怒りに満ちた眼で周囲を見回している。だがその正体は一向に見えない。

『この魔法少女達一人ひとりが、そう……七人衆に匹敵しますの。私に操られていることで、恐怖心は皆無！ もはや戦闘力には埋めがたい差が存在しますの。……この圧倒的戦力差を下敷きにした上で、貴女に一つ質問をさせて頂きますの』

「話が長いですね。質問とは一体なんですか？」

『簡単なことですの。私の仲間になりなさい』

「いいえ」

花井の質問に被らんばかりに、その提案を秀子をはねのけてみせた。秀子はその傲慢が許せなかったのだ。自分の優位を確保し、肝心なことは人任せ、そして回りくどいその言動。秀子が気に食わない要素がこうも揃っているものなのか、と呆れ返るほどだった。

『バカな……悪い話では無いはずですよ』

「貴女の質問に『はい』と答えることが馬鹿らしいですよ」

『では、質問を変えましょう。この二十人の魔法少女に貴女は勝てると言うんですの？』

「はい」

『はいと答えるのが馬鹿らしいといった途端にその言動……。こうなったら、自分がどれだけ愚かか、経験で分らせてあげますの！』

二十人の魔法少女達が、一斉に秀子に飛びかかる。光弾が嵐のように飛び交う中を、秀子は駆ける。剣やら斧やら、近接武器を振る魔法少女達をするりと避け、両手の銃のトリガーを引く。二十対一というこの圧倒的戦力差では、一撃で相手を沈める必要がある。

これで二人減り、残りは十八人。

「あれは……魔法銃術じゃないスカ！ あれはコンさんしか使えなかったはず。そのコンさんも亡くなっているのに、何故……」

「……君が一番よく分かっているのだろう、赤羽」

後ろから錫杖のような長いステッキで殴りかかろうとする魔法少女に見向きもせず、脇からトカレフを向け発砲。一撃。仮に近接格

闘であろうとも、魔法銃術においては、間合いによる不利はほぼ存在しない。通常、銃は点の攻撃であるため、当たらなければそれで終わりである。刀もまた同じと言えるが、刀は間合いに入れば、広範囲に面の攻撃を喰らわせることができる。一撃でも当てること出来れば、という前提は、当然後者のほうが有利ということになるのだ。では、銃を二丁に増やし、面の攻撃に昇華した場合どうなるか？ 答えは、間合いによる不利を三百六十度完璧にカバーすることが可能になるのである。

「金剛地は強かった。彼女は、本来なら花井と互角のはず。それほど一流の魔法少女だったのだ。相打ちがあつても、敗北はありえない」

両手の銃のマズルフラッシュが、暗い森をカメラのフラッシュを焚いたように照らし始める。緋色はそれを見て、美しい光景だと感じた。昔、同じように美しいマズルフラッシュを描いた金剛地に聞いたことがある。

「魔法銃術を極めたらどうなるのかって？ 簡単なこつた。マズルフラッシュが、星空を描き始めるのさ。私の師匠は天の川みたいになるなんてロマンチックなことを言ってたが、私に言わせれば」

銀河。魔法銃術を極めしものは、マズルフラッシュで銀河を描く。最小限の動きとエネルギーで、最大級の戦果を挙げる。魔法銃術の極意を、明らかに秀子は体得していた。

「魔法少女は、握手をした際、相手に自分の魔力を譲渡することができる。彼女は、桜井秀子に賭けたのだ。花井を、狂ってしまった協会を、討ち果たす者として……」

流れるような動きで、両手の銃のトリガーを引く。秀子は、何故自分がこのように、先ほどまで名前すら知らなかった魔法銃術をうまく使えるのか理解していなかった。だが、感じていた。脳そのものの理解と、精神上的の認識は大きく異なるのだ。

恐らく、金剛地さんだ。

精神の奥底のどこかで、秀子は金剛地を感じていた。この力も、

金剛地の助けがあるのだと感じていた。それで十分だった。たった一度、一緒に酒を飲んだ仲だ。それ以上を求めてなんになるう。彼女が飲んでいたマティーニのように、僅かだが確かに存在する友情の証。それが、今の秀子の力の全てなのだから。

「だから、私は」

この友情に感謝しよう。報いよう。それを示すことは簡単だ。勝つことだ。トリガーを引く指が、光弾が出るたびに揺れるバレルが、秀子を勇気づけた。二百六十三回目のトリガーを引き、魔銃トカレフとグロックをくるくると回転させ、ハンマー同士でキスをさせた時、まるで暴風雨が去った跡のように、魔法少女達は倒れ伏していた。

『……それでは、この事件は遠野が犯人ではないと？』

酒木原は見えない相手に向かってこくりと頷いた。

「もうお分かりでしょうが、彼の神罰計画とやらには不審な点が多いのです」

『不審な点ね』

「まず、彼の言う魔法少女の兵器化ですが……わざわざ魔法少女を集めて、殺し合いをさせる必要などありません。もっと効率の良い方法がいくらかでもあるはず。彼ほど頭の良い人間が、こんな非効率な作戦を取るとは考えづらいのです」

「第二に、普段の彼は穏やかでもっと思慮深い人間です。さつき会った時、彼はあまりにも傲慢で無鉄砲で何も考えていませんでした。一言でいうならバカです。まるで別人でした」

『別人だったのか』

「まるきり別人というわけではないでしょうね。本人です。だが、恐らく操られている。どのような操り方かはわかりませんが、幻影でも見ているのかもしれませんが。確かなことは、この幼稚な作戦には、遠野ではない誰かが何かのために動いている。私にはそうと

しか思えません」

『君の言うことはよく分かった。すぐに協会ビルに援軍を送る。遠野は最悪のことがあっても大丈夫、そういうことなのだろう?』

「そういうことです。ああ、私の事はお気になさらず。私はここから向かう場所がありますので」

酒木原は携帯を切ると、協会の駐車場にある公用車に乗り込み、エンジンをかけた。全ての真相は、魔法少女協会所管の国立公園にある。酒木原には、どんな非情な結末が待っているとしてもそれを見届ける義務があった。それが、スカウトとして魔法少女を引き込み、スタッフとして彼女たちを支えてきた自分にできる唯一のことだったからだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7352y/>

魔法係長桜井秀子

2012年1月8日18時51分発行